鍋嶌直茂譜考補

六

和書門
類
三五三八九
號
函
一三
冊
架

内閣文庫
和書
類
三五三八九
號
一三
冊
五八
函
一
四
架

140

内閣文庫
番號 和 35389
冊數 13 (8)
函號 158 299

国立公文書館
National Archives of Japan

閲140

直茂公譜考補第六卷目録

一太閤殿下朝鮮攻之起　天正十九年辛卯　御歳五十四
一諸勢朝鮮渡海　文禄元年壬辰御年五十五
附朝鮮王都落
一諸勢朝鮮都入　同年

国立公文書館
National Archives of Japan

直茂公譜考補第六卷

太閤殿下朝鮮攻之起

一天正十九年辛卯關白豊臣秀吉公去年小田原ノ北條一家御征罰支終リ東西ニ雲治リ南北ニ風靜リテ一天下思召残ス事モナク此上ハ御養子中納言秀次卿ニ關白職ヲ讓ラレ其身ハ異國エ御馬ヲ被向大明四百餘州ヲ掌ニセラレ禁裏仙洞ヲモ豊ニ多年勲功アリシ武家ノ輩エモ猶思賞ノ地ヲ宛行ハル可シト被思召立五人ノ大老德河殿ヲ初メ前田利家浮田

秀家毛利輝元小早河隆景三人ノ小宿老生駒
雅樂頭近正中村式部少輔一氏堀尾帶刀先生
吉晴五人ノ奉行淺野彈正少弼長政増田右衛
門尉長盛石田治部少輔三成長束大藏大輔正
家德善院僧正玄以ヲ三月九日大坂ノ御城ヘ
召出サレ不時ノ御茶ヲ被下シ上ニテ右ノ趣
被仰出ケリ列座ノ面々ロヲ噤テ御返事申ス衆
ナカリシ所ニ德河殿ト浮田秀家同音ニ別テ
珍敷御沙汰共ニ奉存ナリ可然覺エ候ト被申
シカハ關白殿御機嫌能サアラハ來月十五日

異國御征罰ノ為御首途何モヘ御料理被下四
座ノ者共ニ御能可被仰付旨被仰出皆々退出
有ケリ

天正十八年ノ春ヨリ秀吉公大明國ヲ攻
ラルヘシト思ヒ立レ先朝鮮ヲ從ヘ大明
ノ導引ニスヘシト被思彼國ノ地利虛實
ヲ窺ハルヘキタメノ宗義智ニ其臣柳河調
信ト玄蘇西堂ヲ副テ朝鮮ヘ差渡サレ彼
國ノ通信使ヲ招カレシニ李昭王應諾シ
四月初旬信使黄允吉副使金誠一書狀官

許筬上下百餘人日本ヘ差渡サル七月廿
二日大坂ニ上ル此時殿下ハ小田原御在
陣ナリ御歸洛アリテ十一月ニ聚樂亭ニ
於テ謁シ申シ書簡ヲ捧ケ御返簡ヲ請取
義智其外ト同船シテ朝鮮ヘ歸ル義智以
下ハ東平館ニ止宿シ樣々談話アル是ハ
殿下ノ命ヲ相談スル處也然ルニ支ノ埒
未タ果サスシテ義智以下日本ヘ歸ル又
島津義久ニ命セラレ琉球國ヘ使僧ヲ渡
サレ尚寧王ヘ金銀等ヲ贈ル書簡ヲ通セ

ラル是又大明ヲ征セラルヘキ御内略ノ
タメトソ同十九年ノ夏御世繼棄君早世
マシ〳〵殿下御哀愁中々申ス計ナシ異國
攻ノ支モ打棄ラレ御胸ヲ焦サレシ間清
水寺ヘ御參詣ヲ勸メ奉リテ三日御逗留
マシ〳〵ケレト兎ニ角ニ舟御渡ニ搖暮
ラレ夫ヨリ東福寺ニ御參リ妙雲閣ヘ上
ラセラレ半日計リ閑居マシ〳〵御歎キヲ
轉セラレシニ忽チ異國征伐ノ支御決定
アリト高麗軍記

三使朝鮮王ノ書及方物ヲ献ス書曰征韓偉畧

朝鮮國王李昆奉書　日本國王殿下春候和煦動静佳勝遠傳大王一統六十餘州雖欲講信修睦以敦隣好恐道路湮晦使臣行李有淹滞之憂歟是以多年思而止矣今與貴价遣三使以致賀辭自今以往隣好出于他上章甚仍不腆土宜録在別幅庶幾笑留餘順序珍畜不宣左将柳成龍所草也

答書曰

日本國關白秀吉奉書朝鮮國王閣下雁書薫讀卷舒再三比年我朝諸國分離鬪爭紊紲紀廢禮義而不從朝憲予慨然奮激討滅叛逆宇内漸歸廓清矣予素出于側陋然毋孕予也有日輪入懐之祥相者曰日光所及無不照臨壮年則八表仰風裁四海服威名其何疑乎及其倡義也戦則勝攻則破果無不如意數年之間天下大治氏安賊廷遂致帝都壮麗朝家之盛蓋無如今日矣予思人生不滿百安能鬱

欝乎斯土將一超直入明易我朝風俗於
四百餘州施帝都政化於億萬斯年者在
吾方寸中貴國先驅而入朝有遠慮無近
憂乎遠邦小島在海中後進輩者不可作
許容也予入明之日將士卒未軍營則彌
可脩隣盟也方物領納珍重保嗇不宣黄允
書等點書僧玄蘇諸致閣下方物入朝六字蘇即馳啓致閣下方物四字入朝二字
則不許曰此朝字非特貴國也乃指明也往復論難致走數四
今年ノ秋御國中端々迄諸國ノ商人大分
入込烟硝ヲ買取ニ付平吉平兵衛氣ヲ付

密ニ兼合セケル慶明年太閤殿下高麗御陣
ノ由ニテ諸國ノ大名ヨリ烟硝探促有之
段商人共申ニ付早速其段鍋島平五郎迄
言上ス即被遂披露所神妙ノ至ニ被思召
然ハ平兵衛急度肝煎ヲ以力ノ及ヒ烟硝相
調可申代銀ノ儀ハ先以其方取替可差出
御意ノ旨被申渡平兵衛御請申上銀子ノ
儀ハ差出可申乍然某一手ニテ相調ヘハ
延々ニナリ存ノ樣ニ烟硝手ニ入申間敷
願ハ御領中ノ町人頭々ヘ被仰付神文ヲ

以肝煎候様ニ可被仰付ト申上平五郎有
同意自筆ニテ町人頭々ヘ烟硝割付平兵
衛相談ノ上相整ヲ九夫ニ付平兵衛右ノ
人數召寄申達連判ノ神文仕ラセ手前ニ
請取置右ニ付町人中ヨリ如御割付烟硝
七千六百斤早速致調達平五郎迫差出

七百斤 右之所分

五百斤 同 大うた

五百斤 大浦雑人

五百斤 永松 こうた

烟硝七千六百斤内

五百斤 陵 源太

四百斤 町中洞 五百斤 七田 たうた

三百斤 平右衛門 三百斤 情田 重右

三百斤 こうた 三百斤 こうた

五百斤 大 次右

三百斤 中野 新右

五百斤 平右衛門

右之分急度出代物ニ成 平右衛門ヒ後合

四百斤 杉ヶ谷 杉ヶ谷 急度可被

指紙ニ而可有御引渡

九月廿又　平又印

[illegible]

一 [illegible]の代[illegible]年[illegible]

一 [illegible]元年[illegible]平[illegible]

今[illegible]

[illegible]次第[illegible]

一 自[illegible]不及[illegible]

[illegible]神文[illegible]可[illegible]

[illegible]平[illegible]以上用[illegible]

天正十九年九月廿八日　[illegible]印判

[illegible]松[illegible]印判

[illegible]次[illegible]印判

[illegible]印判

[illegible]印判

[illegible]印判

[illegible]印判

[illegible]印判

石高数口子六百石

明ル文禄元年果シテ高麗御陣殺リ右烟

硝御用ニ相立公御太慶被成備又御渡海

船用意イタシ候様ニト被仰付俄ニ數艘

仕立御船諸入具太刀々船釘ニ至ルマテ
平吉平兵衛相調ヘ差上ト平吉家記
一斯テ秀吉公關白職ヲ秀次卿ヘ讓ラレ其身ハ
自ラ太閤ト稱セラレ異國御征罰ノ事彌御決定
アリテ小西摂津守行長ヘ仰付ラレ丹波國内
藤飛騨守加安ヲ以テ先朝鮮國李昭王エ言輪
ヲ差送ラレ大明國エノ案内可仕旨被賜シカ
ヒ李昭王大儀ニ恐レテ御返答不申茲ニ因テ
サラハ先ヅ支始ニ朝鮮國ヲ御退治アルヘシ彼
國ノ海上道乗地利其外案内等宗對馬守能存

申スヘキ由ニテ對馬守義智ヲ召出サレ彼淵
底御尋アル義智申テ云ク朝鮮國海路ノ儀肥
前ノ名古屋ヨリ壹岐ヘ十八里壹岐ヨリ對馬
迫四十八里對馬ノ豊崎ヨリ朝鮮釜山浦ヘ又
四十八里扨朝鮮國八道ニ分タル京畿道江原
道咸鏡道平安道黄海道忠清道慶尚道金羅道
ト申ス國ノ廣サハ日本ニ不可過ト御答申サ
ル太閤被聞召リコク泊リ〻ノ事其外ノ軍事
等細ニ御下知アリテ頓テ六十餘州ノ軍兵ヲ
相催サレケリ

一或記云朝鮮國海上路程ノ事

名古屋ヨリ壹岐迄四十八里壹岐ヨリ對馬

二四十八里對馬ノ城本ヨリ同國豊崎ヘ三

十六里豊崎ヨリ朝鮮釜山浦ヘ四十里釜山

浦ヨリ朝鮮ノ洛ヘ千二百六十里六丁里

一明ノ太祖皇帝ノ御宇洪武三十年ニ高麗ヲ

改メ朝鮮ト云和朝後小松院ノ御宇應永四

丁丑年ニ當ル

一太閤殿下追付御船奉行九鬼大隅守嘉隆ヘ

被仰付朝鮮御渡海ノ用ニ伊勢ノ海ニテ船

ヲ造ラセラル第一ノ御召船ヲ日本丸ト云

中ニモ大船也其外渡海ノ雜兵凡何十萬ト

御積リ其乘船ヲ船付ノ國々ヘ被仰付ケリ

古新ノ船數都合四萬艘也

一或云太閤異國御征罰ノ事兼テ被思召立小

西攝津守ヲ商人ニ被成先立朝鮮國ヱ被差

遣異國ノ人ノ分限海陸ノ遠近ヲ能御量リ

アリケルト也

朝鮮ヘ路程ノ支名護屋ヨリ壹岐ノ風本

ヘ十六里風本ヨリ對馬ノ府中ヘ三十六

里府中ヨリ同國和珥ノ浦ヘ二十三里和
珥ノ浦ヨリ朝鮮釜山浦マテ四十八里凡
名護屋ヨリ釜山浦ヘ日本ノ路程百二十
三里ト九州記
内藤如安嘗テ行長ニ仕ヘ文學ヲ以テ聞エ
故ニ秀吉公特ニ之ヲ命セラル如安行長
ト偕ニ發シ先ヲ朝鮮ニ入行長己カ姓
氏ノ早ク異邦ニ傳ヘンコトヲ思フテ發
スルニ臨ンテ内藤ヲ小西氏ニ改メシメ
飛騨守ト稱ス明人之ヲ小西飛ト云征韓偉畧

一今度朝鮮御陣ノ仰渡ニ付テ當家ヨリハ龍造
寺七郎左衛門家晴成富十右衛門茂安被差登
於大坂右ノ趣美リ罷下リシ所ニ筑前国黒崎
ヘ四五箇年以前朝鮮竹浦ノ者難風ニ放サレ
漂着シ一人生残リテアル由聞付シカハ今度
御渡海ノ便リニモ成ヘキカト是ヲ倶シテ佐
嘉ヒ帰着ス直茂公彼者ニ御不便ヲ被加追付
異國入ノ通事ニ可被成由御悦アル
公ハ名護屋ノ城御經營ノ故ヲ以テ為ニ御
名代龍造寺家晴成富茂安ヲ大坂ヘ被遣

ト主水戰功記

成富茂安大坂ヨリ帰国致シケルニ黒崎ノ驛ニ以前ヨリノ宿アリテ一宿ステ時亭主語テ云ケルハ今度朝鮮ヲ御攻可被成由下々マテ風聞仕候然ルニ朝鮮竹島ノ者有之申ス茂安彼者ヲ召シ連帰リ候ハヽ御渡海ノ節諸事御尋御用ニ可相成儀ヲ計リ亭主ヘ懇意ニ致シ宿禮過分ニ取ラセ右ノ者ヲ連帰ルト成富戰功記

一今度太閤殿下朝鮮御征罰ノタメ九州御下向有之ニ付テ上松浦波多參河守親領内名護屋ニ一城ヲ築セラレ多クノ殿舍ヲ建ラル因茲直茂公ヨリ蓮池城ノ天守ヲ獻セラレケリ其上大手ノ櫓ヲ立ラル三間二十三間也奉行ハ石井生札甲斐彌左衛門久納市右衛門也此時殿下ヨリ直茂公ヘ賜ル書ニ云

就名護屋城普請用為之如叶甲斐彌左衛門生札久納市右衛門尉切〻進相兼作木雪沓乃〻支御木中付ノ成度事ニ候遣作共ニ石法令度度事ニ候拔見候思召ノ為石田左衛門下

七月廿一日　御朱印

直茂公最前大坂玉造ノ於御屋敷藤八郎殿ヲ
初メ御簾中其外被召集被仰ケル ハ太閤頓テ
異国御退治ノ風聞アリ其事實ニ於テハ我等
モ御供ニテ渡海スヘシ老年ニ及ヒ萬里ノ波
濤ヲ凌キ戰場ニ趣ク事ナレハ千ニ一ツモ生
テ歸ラン事アルヘカラス然レハ何モ存ノ通
先年隆信御戰死以後寔ニ浮沉ノ国家ナリシ

ヲ我等不肖ノ身ニテ無恙致連續藤八郎殿ヲ
家督トスサレハ加賀守カ死後ニ我等カ善悪
ヲ沙汰スル者アリ共藤八郎殿構ヘテ實ニ思
ヒ給フ能御成仁アツテ國家ヲ治メラルヘ
シ次ニハ又妻室ニ申置也我異国ニテ死タリ
ト聞ヘナハ早速伊平太ヲ藤八郎殿ヘ給仕サ
セラルヘシ其外國政ノ儀ハ宿老中ノ心ニ可
有事也ト被仰置ヌ

天正十八年朝鮮就御征伐松浦名護屋ニ
一城ヲ被築御奉行ハ加藤主計頭黒田甲

斐守此時同國ノ故ヲ以天守櫓ヲ被為造
奉行龍造寺又八郎久重甲斐石井久納也
鍋島茂里モ掌之ト（主水戰功記）
此時武雄多久其外國中ノ山中ヨリ竹木
ヲ献スト（普聞集）
今度御普請々取ノ覽
一御本丸大手左之御門　御牧勘兵衛尉
一同大手右ノ矢倉　觀音寺
一同取次二階矢倉　同人
一同矢倉　羽柴美作守

一同矢倉　大和中納言
一同取次　同人
一同二之丸ノ間北ノ御門　河原長右衛門尉
一同山里ヘノ裏之路地　寺西筑後守
一同御數寄屋　長谷川宗仁
一同二ノ丸大手之矢倉　鍋島加賀守
一天守　同人
一同天守之下冠木門　太田和泉守
一同三階門　伊東長門守
一同南之御門　木下若狭守

一同外形　同人
一同艮ノ角二階矢倉　溝口伯耆守
一同大手東ノ矢倉　長束大蔵大輔
一同大手北ノ矢倉　大和中納言
一同大手西二階矢倉　浅野弾正少弼
一同南之取次　同人
一同大手三階鐘突堂　丹羽五郎左衛門尉
一三之丸西之矢倉　羽柴河内守
一同冠木門　同名左近
一同西之御門　加賀宰相

一同西北ノ角矢倉　同人
一同取次　同人
一山里御書院　太田和泉守
一同御上　寺澤志摩守
一同御數寄屋　石田左頭
一同御座之間　観音寺
一同上御臺所　同人
一同大臺所　石川兵藏
一同臺所　河原長右衛門尉
一同局　建部壽得

一同局　石田左頭
一風呂屋　仙石権兵衛尉
一同御蔵　戸田清左衛門尉
一同北之矢倉　御牧勘兵衛尉
一同木造之番所　同人
一同御門　同人
一同二階門　石田左頭　高麗軍記
天正十八年ヨリ高麗陣ノ仰付アリテ西
國大名ハ關東出陣被差免ト　奮記
一直茂公加藤主計頭清正一列ニテ小西行長ト

隔日ニ今度朝鮮国可為先陣旨台命ヲ被蒙シ
カハ其為仰談成富十右衛門ヲ清正ノ居城肥
後ノ隈本ニ被仰付ケリ清正十右衛門ニ面談
アリ饗應事終テ後被申ケルハ今度清正朝鮮
ノ御先手ヲ蒙ルノ所ニ武功第一ノ加賀守殿
ヲ相備ニ被仰付寔ニ身ノ太慶不過之尤諸支
無疎意申談ス可シト返答アリケリ夫ヨリ成
富宇土ノ城ニ趣キ小西攝津守ニ御使ノ旨ヲ
申達シケルニ行長面謂アッテ申サレケルハ
加賀守殿ハ九州ニ於テ無双ノ武篇者ト内々

業リ及ミ故此度一列ニ被仰付度旨先立於大
坂申乞シカ尼早清正ニ先ヲ被越其望ヲ不達
残念ノ仕合也ト會釋ニテ相應ノ返答アリ十
右衛門佐嘉工帰ル

一直茂公鍋島平五郎茂里成冨十右衛門茂安ヲ
被召出今度朝鮮陣ノ儀本朝ノ軍ニテモ非ス
異國ニ於テ日本國ノ諸軍勢相集リ月ノ前ノ
鑓ナレハ家中ノ面々能其身々々相勵ミテ他軍
ノ笑ヲ不可受此度ノ軍配両人工相任スルノ
間當家ノ先手ヲ勤ノ隨分粉骨ヲ碎キ功ヲ抽
ツ可シ其為ニ其方共ヨリハ身躰大キ者ヲ多
人數相附ル也何様両人申談シ相働ク可シト
被仰渡ケリ

一當家朝鮮御供人數着到
龍造寺六郎次郎家久（後多久長門守）龍造寺七郎左
衛門家晴（後諫早道安）後藤善次郎家信（後武雄十左衛門）
龍造寺彦右衛門家俊（早世）松浦太郎信昭（後須古下総守）
神代次郎家良（後大炊助）鍋島三郎兵衛茂正（後彌平左衛門）
同助右衛門茂良千葉右馬佑胤信馬場
太郎次郎信貞（後諸兵衛）同名式部少輔姉河平右

衛門房安鍋島新左衛門種卷同生珊入道々
泉同名五郎兵衛同名平五郎茂里成富十右
衛門茂安小川市左衛門家俊同九郎次郎家
尚（後内半）龍造寺又八郎久茂（早世）太田正左衛門
茂連龍造寺太郎次郎茂成（後有田八右衛門）同名典
三左衛門信尚（平五郎内紐ノ）犬塚三郎右衛門茂虎
内田助三郎家勝（後舍人）三浦四郎右衛門賢純
土肥孫五郎茂實（後助解由）龍造寺新介小田太郎
四郎信光馬渡相右衛門茂光鹿江太郎左衛
門信明八戸助兵衛宗春大木兵部少輔統光

龍造寺太郎九郎信成（後小山平五左衛門）南里助左衛
門茂俊綾部右京亮茂幸同太兵衛木下四郎
兵衛昌直龍造寺太郎五郎重純（後松井太郎助）千布
相右衛門賢利葉五郎左衛門河原四郎左衛
門永田源右衛門倉町半兵衛中山又左衛門
秀島源兵衛城松新十郎馬場彌七左衛門重
松太郎三郎馬渡又兵衛土肥茂分東島市佐
百武新三郎（後進士允）石井又左衛門（後伶理亮）宮崎七
右衛門堤左馬允宮部善右衛門前田甚右衛
門（後野村）馬場正兵衛副島孫兵衛納富典一左

衛門今泉吉左衛門副島兵左衛門市川源次
吉島六内田中源右衛門成富新九郎後三郎兵衛
副島太郎兵衛木塚五郎兵衛馬場清左衛門
野副太郎兵衛内田五左衛門千手六之允後鍋
島五郎左衛門下村生運秀平右衛門同助十郎藤瀬
源太左衛門石井七郎兵衛同四郎兵衛堤抜
閑田崎内膳同利右衛門大村平太兵衛甲斐
清兵衛於保賢守牟田茂齊藤島生益恒里生
齊宗賢益号藤島安住典左衛門關典四右衛門
草場藤右衛門梅崎八郎右衛門水町正五郎

徳島長右衛門諸隈掃部允岩村新右衛門山
領主馬允納富六郎福地新兵衛相浦金兵衛
石九喜左衛門原口典三右衛門城島忠左衛
門横田左馬次同九郎兵衛五郎川帯刀薗田
又六納富七郎右衛門小林又右衛門江里土
佐守宮地五左衛門馬渡勘次小川清次秀島
左吉大塚二左衛門大田彦兵衛横田権次郎
田代次郎助大野新五郎諸隈二左衛門石川
帯刀藤山半次郎系山久右衛門江副津之次
久富六郎右衛門木下内藏允横尾十五左衛

門梅崎新九郎東島九郎右衛門土山小次郎
諸岡正兵衛成富久藏山田助左衛門西村長
次郎鶏池傳兵衛中講七藏田雜大隅守同源
次同源六藤山左兵衛内田千右衛門北島六
右衛門受野助六星野又次郎中野新十郎川
浪市之助富岡喜左衛門今泉善介永淵壹岐
守城喜兵衛太田彌八左衛門重松孫四郎永松
相兵衛立川孫五郎三箇島又右衛門倉所八
左衛門常富三郎兵衛三浦右衛門佑小林勝
三郎千布五郎八綾部新三郎辻小左衛門松

田權介金原忠介北村内藏允中島九郎兵衛
勝屋新五郎納富大膳加々良七兵衛同源右
衛門西岡源七郎多々良左之允鍾箇江紀伊
守内田九左衛門納富右馬助永田千兵衛千
布孫次郎岩松新右衛門小野原内記古賀源
次兵衛諸岡彦右衛門江里口九郎右衛門牟
田新左衛門堀江助左衛門松田源右衛門江
副次郎兵衛松岡用右衛門齊藤三右衛門境
纖部同小兵衛櫻木三郎左衛門同甚次郎藤
山四右衛門

御先手鍋島平五郎組

横岳下野守頼續（但陣代地尻右馬助）深堀中務大輔純賢（但陣代石井孫六）田尻丹後守鑑種同嬬子納富又三郎家和山代孫七郎貞（後鍋島喜左衛門）西牟田新介家親龍造寺典三左衛門信尚（後犬塚）水町平右衛門茂成高木甚兵衛盛清同名兵内同典左衛門亂清曲淵孫四郎島原七右衛門留守五郎右衛門堀江八郎左衛門同名典三左衛門同新次郎石井清五左衛門（後縫殿助）大隈久左衛門牟田典右衛門同左馬允大江小左衛門

圓城寺吉藏（姉川太郎三郎後内田正右衛門）重松彌次郎松野新九郎竜造寺左吉（後藤井覺右衛門）同源次郎（後村上源太夫）原口相兵衛同彌次郎相浦新五郎蘭田孫五郎川浪大藏福地助七同兵吉澁谷小藏同善右衛門伊東兵部同伊豫守同助兵衛同久六同半藏枳町藤右衛門同半次堤雅樂倉町五郎三郎竈三次野田彌十野口長右衛門石田典兵衛小柳伊兵衛田中源三郎高雄彌七副島權太西村半右衛門増田主殿同甚左衛門大隈助九郎陣内十兵衛彌永彌

右衛門横尾三郎兵衛秀島甚右衛門同彌介
牛島監物同内記同新右衛門香田左馬允同
内藏助大坪勘右衛門堤源右衛門同又次郎
深河甚右衛門兵動次郎右衛門島内新五同
源三郎同藤左衛門上瀧兵太郎花山久次郎
岡三郎左衛門野中三郎兵衛大串雅樂同名
三郎左衛門貝良田左馬允島内十八貞包左
介江口甚太大島源左衛門島六内堤彌五右
衛門西平七真﨑孫五上野九兵衛上野三郎
四郎同典介大串萬五郎同次右衛門山本正

七同六兵衛服部善兵衛豊田新五左衛門村
上茂八赤司大膳
同御先手　成富十右衛門組
倉町半三郎家秀出雲兵部吹輔信道鴨打彦
六家亂同孫右衛門亂純同源左衛門龍造寺
四郎兵衛信時同吉右衛門同縫殿助同源右
衛門同治部右衛門持末相五郎後助左衛門　成富
源三郎同典左衛門同又五郎同又之允同三
左衛門空閑可清同左衛門大夫同忠兵衛德
島四郎右衛門同名典兵衛井元茂七葉太郎右

衛門前田右馬允後野村中野監物久布白清左
衛門平井典市郎市河彦兵衛山頼典左衛門
服部新左衛門同孫右衛門神代相左衛門安
住主馬允石丸藤太左衛門同千右衛門藤瀬
半七郎河浪作右衛門同織部允猪熊兵次江
口左近五郎川勘之允秀島小右衛門石田典
九郎中村左近河原吉次郎吉谷右衛門兵衛
中島平八志波彦助木塚善左衛門一瀬善左
衛門高雄可給土橋孫五郎仁戸田典右衛門
高木平左衛門成富日向守後補左衛門萩原仁分

同加兵衛於保左衛門尉江口南右衛門百武
平左衛門太波惣吉小川刑部允小柳久右衛
門横田典平次藤崎半七小川三郎兵衛池田
可仙牟田蔵人高岸清右衛門松本作右衛門
堤相兵衛増田善兵衛光武典三左衛門大家
市久中野源五郎赤司角兵衛藤井平蔵兵動
助五郎野田次郎左衛門井原集人仁戸田新
右衛門小川相吉久保内蔵允中村三分川波
正次郎江口源五郎牧口典市左衛門鳥屋九
左衛門野口八左衛門中溝源分江口典三右

衛門武富内蔵助成富吉久真崎萬九郎篠山
甚之允同清八同小七
御旗本
前駈　小川市左衛門同九郎次郎半内支
昇奉行鍋尻孫右衛門蓮池一組内也納富三郎右
衛門横尾内蔵允
弓鉄炮頭龍造寺久兵衛後藤井本告左馬允秀島
源兵衛大塚勝右衛門中野神右衛門
葉次郎右衛門綾部右京亮水町彌太
右衛門藤山久大夫西村平兵衛大野

近右衛門納富千兵衛諸岡相左衛門
御馬廻　鍋島新左衛門同生三両組城原衆蓮池衆
安本源太左衛門多々良兵部野邊田孫兵衛
同平左衛門川副太郎兵衛同五郎兵衛田原
一運同内蔵助同真久同小兵衛後右馬允相良忠
右衛門千布平右衛門灰塚久右衛門小森源右
衛門北原六右衛門同作助江副兵部左衛門
高本内蔵助陣内相兵衛直塚權次郎田原彌
三、執行六内後太郎左衛門同名彦左衛門同四郎右
衛門彌次左久藤崎彦右衛門仁戸田左衛門

江上太郎四郎河瀬十郎左衛門（此時江上）澤野八
兵衛（同江上）太郎兵衛江田刑部允高木新五
郎枝吉三郎右衛門同木工之允同清兵衛島
左馬允今村右衛門佐光安三兵衛大塚九郎
左衛門高木次郎五郎直塚甚五郎成富監物
同仁右衛門西典左衛門柳川左衛門石井
右京亮千塚彦兵（衛）北島八右衛門宗新五左
衛門諸隈又右衛門諸岡清左衛門古舘彌五
右衛門青柳九郎左衛門同新四郎小柳清右
衛門太田典右衛門平井助十郎江副藤兵衛

大庭忠左衛門福島九次十乗坊（家種名代主後十人）名
代主從十二人（同子息孫太郎）執行平左衛門（組私）重松
四郎右衛門（組私）生野次郎兵衛（組私）大庭善右衛
門（組私）
鍋島三郎兵衛（組）藤津衆
嬉野久藏同左馬助同小右衛門同甚右衛門
犬塚彦左衛門同相九郎吉田太郎右衛門上
瀧勝次郎（後孫兵衛）德島典（兵衛）龍造寺新九郎（後三上新）
助蒲原權藏鍋島平右衛門深江助四郎（後橋右衛）
門辻權太郎久間權次郎

御船奉行

田雜源六同源次以上江口源内御船頭池上六大夫同蓬原右京同古賀松大夫子船小柳源兵衛宮市九船頭坂田源右衛門御船早古井太郎左衛門御召船役者

右之外御膳部大工鍛治御中間略之

惣合軍兵壹萬貳千人

村上源大夫有親龍造寺名字十ハヲ公ヨリ此節村上名字ニ被召成茂ノ御一字被為拜領茂親ト相改メ御供ス御帰陣ノ上

日二日廷ノ紋所ヲ九ノ内釘貫ニ相替ル

ト村上戦功記

大木隼人助統清并一族大木有竹齊同大藏允同元真齊同阿波同内藏助同六右衛門及ヒ中原江口小森原口光安小柳小宮栗山森鹽塚等ス〻ヘテ組私百五十人公ノ御旗本ニ罷在朝鮮所〻ニ於テ相働クト

大木戦功記

御勢一萬二千ノ内鍋島平五郎八三千餘彼相附ト主水戦功記

戍富茂安備ニ相伴人并組人數平尾吉右
衛門（本文ニハ同縫殿助同源右衛門同治
龍造寺）
部右衛門藤山助太郎堤葉之助兵動勘五
郎（本文ニハ野田三郎左衛門本文ニハ次
助五郎）
永山彌六郎淵善次郎今津九郎右衛門堤
利右衛門中島九郎兵衛蒲原孫七郎平方
六之允等アリ（此外本文同上同ニ畧之）
土肥出雲守御供シ渡海ス朝鮮陣中秀吉
公ノ御朱印ヲ頂戴スト土肥戰功記
公五十四歳ノ御時也

諸勢朝鮮渡海
附朝鮮王都落
一文祿元年壬辰（天正廿年改元ス今ノ春朝鮮攻
年大明萬曆廿年）
ノ御用意支調リ三月朔日御先勢加藤主計頭
清正小西攝津守行長大坂ヲ被打立夫ヨリ諸
國ノ軍勢引モ不切大閤殿下ハ同月廿六日御
出京廿七日ヨリハ御跡備ノ衆被打立四月五
日六日迫ニ不殘發足也
按ニ文祿元年ハ後陽成天皇御即位六年
ニテ明國十二世ノ主神宗皇帝朱翊鈞萬

曆二十年朝鮮十代王李昭在位二十九年

二當ル

一軍役御定

一九州四國　高一萬石ニ付六百人

一中國紀伊國邊　同五百人

一五畿内　同四百人

一近江美濃伊勢尾張邊　同三百五十人

一三河遠江駿河邊　同三百人

一能登若狭邊　同三百人

一越後出羽陸奥邊　同弐百人

都合四十八萬人ノ御積也

太閤殿下諸國ニ令シテ云ク　征韓偉畧

東国兵不便于舟陸路可免名護屋南海

四國九州兵便于舟舟路可航朝鮮如軍

賦或半之或三之或五之依國遠近為其

輕重諸国各辨三年之粮先征朝鮮以為

征明之基又令列國之兵至朝鮮之岸則

破釜焚舟不許掠人取戦前死者録其子

孫退者斬首族滅

又御朱印五通　旧記聞集

定

一軍勢味方之地江切入之輩 堅法度 狼藉之儀可為
一 切事
一 放火 而火を放候族有之ハ可為
自然 ちくてん 世一めいを主人 を為罷科事
一 雑ハ ふたきしけ しい下 を主人 相任 ふ
右条々 為令遵 此旨 堅被 仰出 ふ
天正二十年正月日 御朱印
禁制
一 軍勢甲乙人 不 乱妨 狼藉 之事
高麗國

一 放火事
一 対他下人 百姓 不 非 分 之 仕 事
右条々 堅 令 法 度 遵 此 旨 被 仰 出 之 速 可
令 成 敗 者 也
天正廿年正月日 御朱印
為 度 法 仕 出 之 高麗 対馬 守 小西 摂津 守 我
三月中 ニ 対馬 ニ 先 渡 海 之 衆 ハ 高麗 ニ
可 相 渡 之 事 中 ハ 高麗 一 里 二 里 ニ 陣 取
ニ 陣 を 取 ハ 対 馬 可 為 陣 ハ 中 ハ 高
ハ 渡 海 為 陣 対 馬 小 西 一 存 在 可 相

御奏聞ハ毛利ゟ存知ゟ可申ハ
清自少弐殿生分ゟ三月十日ゟ出船ハ
十日比ゟ出ゟ依船ゟ取ゟ被附月
可有御意ゟ存清ゟ
二月廿七日　御朱印
黒田甲斐ゟ
毛利ゟ
諸浦加賀ゟ
船ハ陸地ハ風ゟ在所ハ
松ゟ五十年ハ

先書陸ゟ行列寺沢志摩守ゟ書面
ゟ清ゟ対馬ゟ小西高麗ゟ被仰加藤主計
高麗一里二里隔ゟ清ゟ高麗州
口ハ共対馬ゟ渡海ゟ対馬ゟ出
ゟ和平ゟ御申相ハ仕ゟ渡申ハ
右ゟ人口ゟ出ゟ申ゟ動在御右出ハ
東ハ文禄ゟ申ゟ文禄ゟ対馬ゟ清ゟ
高麗ゟ

三月廿日　御朱印
毛利ゟ渡ゟ

九州筋

旧国筋　伯耆　出雲　石見

中国筋　丹後　但馬

かうらく　つしま　いき　なこや

平戸より　平戸より　平戸より

平戸川主馬首　阪ア宋女ニ　一柳右衛門　石田治部少輔

毛利氏ア右輔　九鬼大隅守　加藤右馬頭　大谷刑部少輔　石田治部少輔

毛利兵部大輔　秋坂中務大輔　前田玄以　増田長盛

天正廿年三月十三日

黒田甲斐守　端谷加賀守

一太閤殿下海上殊ニ順風ニテ九國ノ地ニ御着船アリ筑前路ヘ御入肥前ノ内鏡海道御通リ也直茂公無テ御馳走ノタメ鏡松原ニ茶亭ヲ御用意被成殿下ヲ御請シアル其奉行ハ鍋島平五郎ナリシカモ朝鮮御先手ヲ仕ル故馬渡彌七左衛門代之殿下御機嫌能彼茶亭ヘ御入少時御休息アリ四月下旬名古屋ヘ到テ御着マシマス此時信州太守勝茂公ハ十三歳ニ被為成伊平太清茂ト申シケルカ大坂ヨリ御供ニテ名古屋ヘ御着也船ヨリ押廻ス面々ハ先

立テ四月十日比皆々名古屋へ着船アル

一名古屋御陣場之次第但相知レタル分也

名古屋御在陣一萬五千人 徳川殿 御後備五百人 長東大蔵大輔 同所

山中吉内 同藺

六百五十人名古屋在陣 富田左近将監 宮口

二千人同在陣 村上周防守 館辻

二百人同在陣 北條美濃守 寺坂

七百人同在陣 真田安房守 中尾

同源五

大久保七郎右衛門 木多平八郎 同所

千人同在陣 伊東長門守 同所

七千二百人朝鮮渡海 蜂須賀阿波守 鳥巣

千二百人同渡海 大谷刑部少輔 魚見崎

三千人同渡海 増田右衛門尉 神田波戸家村後

二千人同渡海 相馬長門守 長田上

石田治部少輔 堤野本

千五百人同渡海 九鬼大隅守 原田

五千人内上松浦黨七百五十騎同渡海 波多三河守 屋崎戸

芦原観音寺 馬立

大野修理亮 辻上

二百人 寺西志摩守　古館
三百人渡海 新庄新三郎　鹽屋
三千人名古屋在陣 蒲生飛騨守　白崎
三百人同在陣 加藤出羽守　同所
二百五十人御後備 氏家志摩守　中野
百五十人布同 氏家内膳正　同所
二千人名古屋在陣 佐竹右京大夫　嶽 渡戸
一萬人朝鮮渡海 島津兵庫頭　湯蓋
五千人名古屋在陣 上杉景勝　久三ヲ 直江山城守　泊崎
五百人同在陣 宇都宮彈正三郎　針尾

二百人御後備 蒔田權之佐　馬立辻
八百人渡海 高橋九郎　小崎
三千五百人同渡海 細川越中守　水タレ
二千人同渡海 毛利壹岐守　大畑
名古屋在陣 淺野彈正少弼　二丸
一萬人同在陣 大和大納言　鉢畠
千三百人同在陣 溝口伯耆守　清水口
八百人同在陣 京極若狭守　薄水
山内佐渡守　日影
一萬人朝鮮御先手 加藤主計頭　大平

多賀出雲守　串辻
六千人内渡海
黒田甲斐守　猿浦
百六十人御後備
寺澤志摩守　ソベ石
羽柴宮内　同所
八千人名古屋在陣
前田利家　板屋町
二千五百人朝鮮渡海
立花左近将監　穀出シ
九百人内渡海
筑紫上野介　三本松
一萬人内渡海
小早川隆景　コボシ木
蒔田角兵衛　姥坂
御牧勘兵衛　廿工

堀久太郎　セニニウ
一萬二千人朝鮮御先手
鍋島加賀守　高嶽
一萬人内渡海
浮田秀家　笠カツリ
二千人内渡海
藤堂佐渡守　八床
八百人御前備
金森法印　同所
羽柴左近　石屋町
千五百人御馬廻
木下半介　金町辻
六千人朝鮮渡海
大友豊後守　赤松
四百七十人御前備
稲葉兵庫頭　大坂辻
千五百人名古屋在陣後ニ渡海
伊達陸奥守　田向

八月 丹羽五郎左衛門尉 左陣 魚見崎

七月 小西摂津守 朝鮮御先手 折檮

十人 青木紀伊守 名古屋左陣 石屋町

仙石權兵衛 鹽屋

大閤京師御發馬ノ時奉行衆ヨリ願ハク

八文字ヲ呂連ラ明國朝鮮贈答ノ書牘

草案ヲ掌トラシメントヲ申上ラレシニ大閤

ノ仰ニ彼土ヲシテ我国字ヲ用ヒシメン

何リ外邦ノ文字ヲ用フルヲセニヤト然

尼僧義允靈三永哲ニ命セラレ共ニ名護

屋ニ趣カシムト征韓偉略

太閤殿下ハ名古屋經塚山ノ峯ヲ開キ岩ヲ割

テ石壁トシ土ヲ鑿テ堀ニ構エ假リノ居城ニ取

構エラレ御入アル其地形西北ニ秀テ南ニ向ヒ

東ハ呼子壁島ノ海西ハ野山數里打續キ北ハ

海上漫々トシテ壹岐ニ隣リ尤要害全クシテ且

景色モ云ニ絶タリ日本國ノ諸侯群リ集リテ

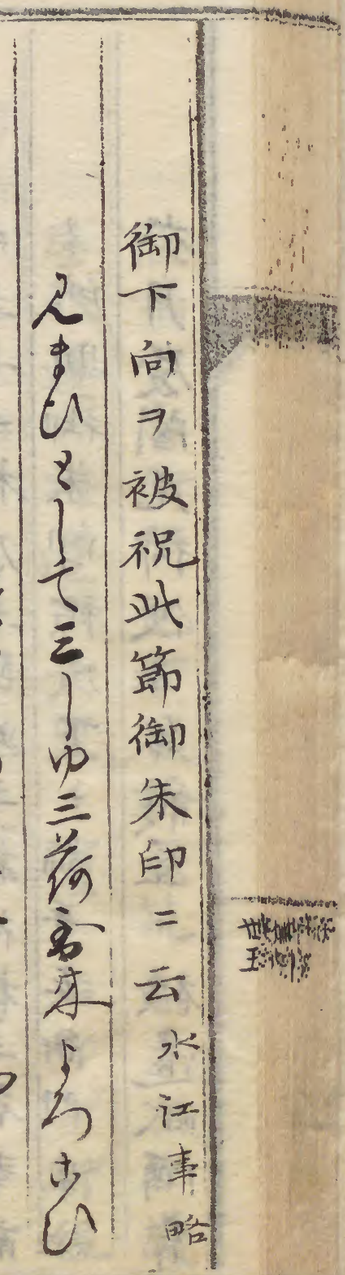
夥敷トモ其計リナシ

正月草野ニ茶亭ヲ構ヘ事ヲ公ヘ相伺ヒ

鍋島茂里經營ノ奉行ヲ勤ム下奉行ハ馬

渡猪七左衛門也右草野ハ筑前ヨリ名護
屋ヘ通ル海邊ニ二里ヶ濱ト名付テ行程
二里ノ松原有其間眺望殊ニ勝レタル所
也ト主水戦功記
草野御茶屋御馳走ノ儀茂里ヘ被仰付其
節池尻源十郎被召寄殿下ノ御前ニテ仕
舞囃子三番仕リ別シテ御入興即寺澤志摩
守ヲ以テ源十郎ヘ巻絹並紬地ノ印籠ニ
被下召連タル者古賀織部鷺村新兵衛中
山彦兵衛犬丸權左衛門右四人ハヤシ方
イタシ重テ御所望有之江口ノ仕舞イタ
ス源十郎ハ夫ヨリ直ニ高麗罷立始終茂
里ハ相附働キ申スト主水戦功記
伊平太公ハ黒田如水傍ニ被召置萬事御
見習被成様ニト御約束ニ付テ名護屋御
陣所ヘ御詰被成ト舊記
秀吉公名護屋御在陣ノ内鍋島信房ヨリ
九年母一桶鳥五貝鮑三桶御樽三荷奉献
ノ所則御朱印被成下ト舊平左衛門家記
六月慶間尼御使ヲ名護屋ニ被遣献酒有

御下向ヲ被祝此節御朱印ニ云水江事略



六月七日　御朱印

けいきん

一朝鮮渡海ノ惣大將兩人毛利右馬頭輝元（号安芸中納言）浮田備前守秀家（号備前中納言）也

一先陣ハ二列ニ分タル其一列ハ小西摂津守行長（其勢七千）宗對馬守義智（同五千朝鮮案内者也）松浦肥前守鎮信（于時刑部卿法印）同名源次郎定（合同三千）有馬修理大夫天政純（同二千人）大村新八郎喜前（同一千人）宇久大和守盛勝（同七百号五島）以上合壹萬八千七百人也又一列加藤主計頭清正（其勢一萬）鍋島加賀守直茂（同一萬二千人）相良宮内大輔長安（同百人）以上合貳萬二千八百人也清正行長闔ヲ取テ闔次第各日ニ可為先陣旨先立於大坂蒙台命

一二陣ハ右兩人非番ヨリ可相進旨被仰渡清正行長兩人御先手ヲ被仰渡ケル時大坂ノ御城ヘ被召出清正ハ朝鮮ニテノ制札軍書一卷並南無妙法蓮華経ノ御旗ヲ賜ル

此旗ハ太閤未ノ羽柴筑前守ニテ織田信長公
ヘ仕ヘ播州姫地ヲ知行アリシ時給ル所ノ
旗也依テ為吉例今度被下由也行長ヘハ同
制札軍書一巻並名馬一匹大黒給之各領國
肥後ヘ下ル
大閤彼両人ヲ御先手ノ相備ニ被仰付ケル
ハ御思慮有テノ事也其謂ヲ尋ルニ去ル天
正十六年ニ佐々陸奥守ノ跡肥後國隈本宇
土ノ両城ヲ清正ト行長ヘ被ヲシ所ニ両方ノ
百姓共モ境目ヲ論シテ各領主ヘ訴ヘ其上
大坂奉行中ヘモ申上ケリ此事ニ付テ清正
行長會釋悪ク成ル亦行長ノ領内ニ志岐兵部
入道麟專一揆ヲ企ケル時行長急ニ静ムル
支ヲ不得清正早速蒐ル行長ヲ見次テ麟專
力伯母聟木山彈正ヲ自鑓下ニテ討捕被申
其後一揆モ静リシニ行長一言ノ謝禮モナ
シ彼是ノ事ニ付テ両人中悪ク成シヲ大閤
能御存ニテ態ト両将ニ勇ヲ諍ハセントノ
謀ニ今度両先手ニハ被仰付シトナリ
一三陣黒田甲斐守長政（実ハ五千）毛利壹岐守勝信（同ニ千）

高橋九郎元種（同一千人）秋月三郎種長（同一千五百人）伊東
民部大輔祐岳（同千五百）以上合一萬千人
一四陣太友豊後守義統（其勢六千）島津兵庫頭義弘（同一萬
同名又七郎豊久（同一千人）以上合一萬七千人
一五陣福島左衛門大夫正則（其勢千八百）戸田氏部少
輔勝豊（同三千九百人）以上合八千七百人
一六陣蜂須賀阿波守家政（其勢七千二百）長曽我部土佐
守元親（同三千人）生駒雅樂頭近正（同五千五百人）以上合一
萬五千七百人
一七陣小早河筑前守隆景（其勢一萬）毛利藤四郎秀包
（同千五百）立花左近将監宗茂（同二千五百人）高橋主膳正直
次（同八百人）築紫上野介廣門（同九百人）以上合一萬五千
九百人
一八陣大将毛利中納言輝元（其勢三萬人）
一九陣大将浮田中納言秀家（其勢一萬人）但此一列八
先（ヵ）對馬ハ在陣シ見合セ渡海スヘキ由
一浮勢岐阜少将織田秀信（其勢八千）細川越中守忠興
（同三千五百人）合一萬千五百人但此一列八壹岐ニ在陣
シ見合セ渡海スヘキノ由
一舩手九鬼大隅守喜隆（其勢千五百人）藤堂佐渡守高虎

同二十人 脇坂中務大輔安治 同千五百人 加藤左馬助喜
明同千人 來島出雲守通綱 同七百人 菅平右衛門達長
同二百五十人 桑山小藤太同 小傳次同千人 堀内安房守
氏喜 同八百五十人 杦若傳三郎 同六百五十人 以上合九千四
百五十人
右朝鮮國渡海人數惣合凡十六萬九千七百五
十人或云廿萬五千五百七十人
諸手軍役ノ御朱印二云 舊記
先手仮之事
一 大千人 羽柴對馬侍従
一 七千人 小西摂津守
一 三千人 松浦刑部法印
一 弐千人 有馬修理亮
一 千人 大村新八郎
一 七百人 宇久大和守
合壱万八千七百人
一 壱百人 加藤主計頭
一 壱百弐十人 毛利加賀守
一 八百人 右衛門督
合弐百弐十八百人

一五千人　　武田早雲寺
一六千人　　相模国住人
一四千人　　毛利元就
一三百人　　相模薩摩守
一弐千人　　高橋九郎
秋月三郎
伊東民部大輔
島津又七郎

合弐万五千人

右一月廿日書誓紙可仕

同次ニ傾

一四千五百人　　福島左馬之丞
一三千九百人　　戸田民部少輔

合八千七百人

一七千五百人　　蜂須賀阿波守

以上

一三千人　　相模国住人
一五千五百人　　生駒雅楽頭
一七百人　　木下藤吉郎

合九千五百人

一三百人　相葉小前伝兵

一千五百人　相馬内蔵伝兵

一二千五百人　相馬柳川伝兵

一八百人　高橋主殿

一九百人　筑紫上野介

合三万五千七百人

一三万人　相葉安藝守

以上

総合十三万人

右之外後詰三隊之者一日暫ニ方行仕り居

候事

次ニ御加勢之事

御加勢大明寺城江戸伊勢守殿

江戸詰方行仕り居候ハ、日本ニ箱きり江戸ニ

さらへ五百人ニ而ハ氏郷方行仕り居候ハ、会津

まで大明寺城江戸伊勢守殿江戸ニ而

下屋敷ニ而仕り居候

右馬頭大名利[刑]詰ハ備可申候

天正十年六月三日　御朱印

加藤主計頭殿

佐藤加賀守殿

一陣二陣本文ノコトシ三陣黒田長政大
友義統毛利吉成島津義弘子久保高橋元
種秋月種長伊藤祐岳島津忠豊四陣福島
正則戸田氏繁五陣蜂須賀家政六陣長曽
我部元親生駒親正来島兄弟七陣八陣八
本文ニ同シ凡惣勢十三萬餘ト征韓偉畧
一二ノ陣本文ニ同シ三陣大友黒田四陣
島津義弘豊久毛利勝信秋月伊東五陣福島戸
田長曽我部六陣八蜂須賀生駒七陣八陣
本文ニ同シ外ニ浮田織田秀信細川幷ニ

船手人數本文ニ同シ高麗軍記
右ノ外浮勢三組
増田右衛門尉三千石田治部少輔二千大
谷刑部少輔千二百人前田但馬守二千加藤遠
江守千人合九千二百人一組浅野左京大
夫三千人中村右衛門大夫三千人遠藤右馬助
千四百人谷出羽守四百人一柳右近將監四百
人石川肥後守三百十人五宮部兵部少輔千人南
条左衛門尉千五百人木下備中守八百十人五鹽屋
新五郎四百人齋村左兵衛督八百人明石左近

八百人別所豊後守五百人服部采女正八百人竹
中源次三百人郡上侍従千四百人合一萬五千五
百五十人一組池田三左衛門八千人長谷川
藤五郎五千人木村常陸介三千五百人糟屋内膳
正二百人太田小源五百二十人亀井武蔵守千人
片桐東市正二百人同主膳正二百人小野木縫
殿助千人野村兵部大輔七百人岡本下野守
五百人高田豊後守三百人藤掛三河守二百人古
田兵部少輔二百人新庄新三郎三百人早川主
馬首二百五十人毛利民部少輔三百人合一萬三

千九百七十人一組右浮勢三組合三萬八
千七百二十人此勢八御下知次第重ヲ可
渡海ノ由ト高麗軍記
一徳河殿其勢一万五千大和大納言秀長同一万人前田利家
同八千人結城秀康同千五百人織田常真入道同千五百人上杉景
勝同五千人蒲生飛騨守氏郷同三千人佐竹右京大夫義
宣同三千人伊達陸奥守正宗同千五百人最上出羽守義光
同一千人里見左馬頭義康同百五十人森右近大夫忠政二千人
毛利羽五郎左衛門長秀同八百人京極若狭守高次八百人
毛利河内守秀頼同千人秋田太郎實季同二百人津軽

右京助宇都宮彌三郎各五百人南部大膳大夫信直同二百人朽木河内守元綱同三百人北條美濃守氏規二百人
村上周防守同千人二溝口伯耆守同千三百木下若狭守
勝俊同千五百同名宮内少輔同五百人同右衛門督二百五十
其外關東衆合七萬四千七百廿人御前備衆合
五千七百四十人御弓鉄炮衆合千七百五十五
人御馬廻衆合一萬四千九百人御後備衆合五
千三百人右八名古屋在陣人數凡合十萬二千
四百十五人

名護屋在陣ノ衆本文ニアル人數外如左

織田上野介信包三千人堀久太郎秀政同弟
美作守六千人村上周防守頼清二千人水野監
物忠元千人或八下野守信元上那須大郎資晴二百五十人
日根野織部正高吉三百人仙石越前守秀久
千人青木紀伊守千人石川玄蕃允五百人本
多伊勢守百人合七萬五千二百餘人御前
備之衆富田左近將監信高六百五十人羽柴下
総守勝雖三百人赤松上総介義祐二百人市橋
下総守昌之二百人金森飛騨守八百人蜂屋大
膳大夫百七十人津田長門守五百人池田備中守

四百人小出信濃守四百人奥山佐渡守三百五十人
山崎左馬允八百人稲葉兵庫頭五百人上田左
太郎二百人合五千七百七十人御弓鉄炮之
衆大島雲八二百人木下典右衛門二百五十人伊
藤彌吉二百五十人野村肥後守二百五十人船越五
郎右衛門百七十五人宮木藤左衛門百三十人橋本
伊賀守百五十人生熊源次二百五十人鈴木孫三郎
百人合千七百五十五人御馬廻之衆御小
姓衆六組三千六百人室町殿五百人御伽衆八百
御使番衆七百五十人木下半次組千五百人誥衆千二

百人御鷹師八百五十人中間千五百人合一萬四千九
百人御後備ノ衆織田三吉信秀三百人長束
大藏大輔正頼五百人蒔田權之佐正時二百人
有馬萬次豊氏駒亥二百人木下左京亮秀規百五
十人山崎石京亮二百五十人中江式部大輔百七十人
生駒修理亮百三十人同主殿助百人講口大炊
次百人河尻肥前守二百人池田彌右衛門五十
人閑島彦太郎二百人大鹽典市郎百二十人寺西
筑後守同次郎次四百人矢部豊後守百人福
原右馬助五百人長谷川右兵衛尉二百七十人竹

中冊後守二百人松岡右京進百人川勝右兵
衛尉七十人氏家志摩守二百五十人同内膳正百五
十人寺西勝兵衛二百人服部土佐守百人合五千
三百人右名護屋在陣人數合十萬三千餘
人惣軍合三十萬九千六百餘人高麗軍記
一四月十二日辰ノ刻西海南海山陽山陰ノ軍勢
異國征伐ノ首途トシテ西ニ向テ石火矢ヲ放
関ノ聲ヲ三度作リ一向ニ纜ヲ解テ朝鮮國ニ
向フ
朝鮮御征伐ノ諸將渡海アリ此節龍造寺
七郎左衛門諫早津水ヨリ乗船吉方ニ付
喜々津尾崎屋敷ト申ス所マテ首途イタ
シ喜々津元カマト申所ヨリ出船名護屋
ヘ趣ク彼地ヨリ公ノ御供シ竹島ヘ着船
スト諫早戦功記
一直茂公ハ御留守ニハ政家公ヲ奉初鍋島豊前
守信房石井壹岐守ニハ石井黨十八人被相附其
外老功ノ衆被残置名護屋ヘ被越文禄元年壬
辰三月下旬ヨリ四月ニ掛テ名護屋伊萬里ノ
両津ヨリ御勢一萬二千人段々ニ出船ス直茂

公御自身ハ三月廿日ヨリ先御馬廻計リニテ
加藤主計頭清正相良宮内大輔長安黒田甲斐
守長政毛利壹岐守勝信ト同ク名護屋ヲ御出
船アル其外小西摂津守宗對馬守等ノ御先手
衆モ皆纜ヲ解テ押出サル折節公ハ御病氣ニ
テ御難儀ノ躰ナリシカ共縦船中ニテ被相果
トモ不苦由被仰押テ御乗船アリケリ此時ノ
御召船ハ國一丸ト申ス四十六丁立ノ船也其
外御召船ハ代丸宮市丸稲佐丸等數百艘ノ船
共海上ヘ押出シケルニ他家ノ船ニハ皆船印

ヲ立タリシニ當家ノ御船ニハ船験ナシ直茂
公御覧アリ是ハ如何ニト被仰ケル時ニ御船
頭池上六大夫仕様コソ御座候ヘト白紙ヲ取
出シ其角々ヲ取テ一結ニシ竹ノ先ニ結ヒ付
テ御船ニ立タリ是ヨリ彼印御吉例ト成今ノ
角取紙是也
右國一丸後ニ御長孫元茂ニ被進彼御一代
御乗船ト成ル
斯テ明レハ廿一日海上四十八里ヲ過テ壹岐
ノ風本ニ御着船アル其翌日ヨリ逆風頻リニ

強ク大浪打覆ヒシカハ御渡海不相叶風本ニ
數日御滯留也
同廿六日御先手鍋島平五郎茂里伊萬里ヲ
リ出船同廿九日平五郎典力田尻丹後守鑑
種山代孫七郎貞モ伊萬里ヲ出船シ星鹿ニ
至テ風ヲ待ツ
直茂公波風少シ静ナリシカハ四月二日湯浦ヘ
御船ヲ被廻同五日同所御逗留於髮田尻丹後
守山代孫七郎着船ニ依テ御料理被下良御咄
同六日清正ノ家人ト當家ノ人數喧嘩有之

按ニ焼残反故朝鮮竹島城普請ノ時加藤
家ヨリ役夫四千人程當家ヨリモ四千夫
計ニテ相勤ケルニ雙方喧嘩仕出シ両家
ノ奉行嚴シク制シケレ共手ニ不及公平
五郎茂里ヲ召シ中々ニ彼ヲ切崩スヘシ
ト御下知アリ茂里時分未タ早ク候見合
セ可相計ヒ申上ル所清正被參公ヘ向ツ
テ両家中ノ喧嘩ニ及ヒ場所悪ク然ルヘカ
ラス御同意ニ於テハ相鎮メタキ由公御
答ニ仰御尤御同意ニ候何トシテ可相鎮

ヤト其節平五郎某参リ可鎮ト云テ其座ヲ
立郎大勢ノ中ニ割リ入大聲ニテ何レモ
静マリ候ヘ申聞ル儀アリト手ヲ叩キ呼
ハリシカハ闘諍ヤシ相止ケルニ告テ曰
両家ノ御主人御相談ニテ場所柄喧嘩不
届ナリ乃チ可相止旨仰ラルノ段申聞ケレ
ハ其一言ニテ雙方ヒシト静マリ多人数
離散致シケリ清正茂里ヲ殊外稱美ニテ
辨慶ニモ増タル由會釋アリ八島ノ戦佐藤次信討死
ノ時義経公人数ヲ引揚ヘシト辨慶ヘ命セラル辨慶呼ハリ鎮メケレ共多人数ト

ヨメキテ下知トバカス辨慶ニワカニ赤
衣裳ヲ着カ高キ所ニ上リ戸板ヲタヽキ
マヒ狂ヒタリ諸勢是ヲ見テシハラク静
マリヌ其時下知ヲクハヘ人数ヲ引アケ
ケリ此説本文ト時月場所異ナレ共定メ
テ一場ノ事ナルヘシト推知セラル
公佐嘉御出馬三月三日辰ノ刻ナリト多々
良戦功記
公四月十二日ヨリ御渡海此節龍造寺六
郎次郎家久手勢八百餘人ヲ召連御供ス
ト多々戦功記
御出陣ノ節於興賀社仁王経千講座ノ御

祈禱被仰付御供ノ侍以下迫御守ヲ頂戴
ス扨當社ヘ御門出被遊八丁馬場北脇軍
勢ノ備所也 典賀社記録
鍋島信房ハ高麗渡海スヘク相極メ居候
處公被仰ハ今度朝鮮數千里ノ外測底モ
御不案内ノ敵地ニ被為越ヲ十レハ御國
政ノ儀甚タ御案シ被遊間悴三郎兵衛渡
海致サ信房ハ御跡ニ残シ被置三ノ御
丸罷在御國政ノ儀嚴重可申談旨被仰付
ト 彌平左衛門家記

綾部右京御供スヘク其砌身玄蕃十四歳ニ罷
成若輩ノ上無屬者ニ付テ不被召連諸人
出陣スルヲ玄蕃見申テ朝鮮エ不被連越
ハ切腹可申由ニ付一門共不及力任其意
御跡ヨリ便宜ヲ求メ自分ニ罷越於朝鮮
御目見シ即右京エ被相付ト 綾部戦功記
右近刑部ハ有德成者ニテ高麗御陣御跡
金銀等御手支ノ儀心遣仰付罷在シニ御
帰陣ノ儀心元ナク奉存御機嫌伺ヒトシ
テ高麗可罷越トイタスハ所病氣差出ニ付

悴孫右衛門可罷渡由公御兄豊前守へ申
達スル所感悦致サレ因テ孫右衛門ニテ
公へ書狀被差越ト舊記
御渡海ノ節古賀松大夫此前朝鮮へ渡リ
案内能存シ且又手船所持仕段被聞召御
供可仕由被仰付新造ノ手船名護屋へ乘
廻シ御供ス於彼地御人數ニ被加ト舊記
藤原三右衛門モ以前朝鮮へ渡海上備又
彼地ノ儀能為存者ニテ手船差出シ御供
イタス様ニ被仰付百八十石積鹿尾ト申ス

船新造ニ作立名護屋御陣屋御用ノ桟木
等方々ヨリ運送ス其後右船ニ御先手ノ
御人數乘組被渡大園源左衛門モ前遣數
度渡海シ功者ニテ手船ヨリ御供イタス
様被仰付新造仕立名護屋乘廻シ御供ス
中村九郎右衛門モ船ヲ作リ御供スト舊記
池上六大夫御呂船々頭ニテ彼地手當ニ
有之島ヲ御乘取被成刻何リ印ヲ立候様
ニト御意ニ付テ鼻紙ヲ竹ニ結付相立申ス
慶別テ御吉例ニ被思召以来船印可致被

仰出トモ古井太郎左衛門御召船役者致
シ釜山浦マテ御供シ於彼地惣人數ヘ加
ヘラルト舊記
鍋島生三ヲ以テ石井一門中ヘ被仰渡ハ
世上騒動ノ時分公ニハ遠國御出陣ニ付
萬事御賢慮可被成御暇モナク勝茂公御
歳十三ニテ御國許ヘ御座被成ナレハ
於蓮池石井寄合ノ者奉守護萬一ノ儀モ
アラハ身命ヲ限リ心遣可仕被仰出依之
老若共ニ於彼地御側ヲ不離御奉公相勤

何レモ苦勞仕ルニ付同苗中ヘハ木千二
百石御加增被為拜領ト石井戰功記
一同六日小西摂津守密ニ宗對馬守ニ向テ被申
ケルハ海上少シ靜リヌ此躰ナラハ御邊ノ領
國對州迫ノ渡海如何成間敷ヤト談合アル義
智返答ニ事安カルヘキ由被申シカハ行長悦
ヒサラハ渡海致スヘシト忍テ家人共ニ是ト
知セ其夜半ニ艤シ錠ヲ起シナハ物音シテ他
家ノ船ニ知ルヘシヤヲラ繩ヲ切テ密ニ船ヲ出
セト下知シ錠共ヲ悉ク切捨已カ一組計聲モ

セス船ヲ出ス行長武運天ニ叶ヒケルニヤ明ル
七日ノ午ノ刻迄順風ニテ四十八里ノ灘ヲ走
リ過對州ノ城本ニ無難着船シケリ
四月十三日加藤小西鍋島黒田等壹岐ニ
着順風ヲ待小西行長密ニ船ヲ出シ對馬
豊崎ニ至ルト普聞集
四月十一日東北ノ風アリ義智ハ船ヲ出
サントテ行長ハ出サニフヲ欲セス故ニ
順風ナレ𪜈船ヲヤラス十二日行長義智
等カ兵船七百餘艘大浦ヲ發シ釜山浦ニ

向フ諸將ノ船モ又相ツヾキ来ルト征韓偉畧
一其曉直茂公加藤主計頭相良宮内大輔黒田甲
斐守毛利壹岐守等小西ノ船ノ不見ニ被驚ス
ハタシヌカレケルヨト腹ヲ立テレ其日ノ己
ノ刻計リニ船ヲ出サル然ル處ニ海上五六里
ヲ漕出シテヨリ又以ノ外逆風強ク成テ大波
山ノ如ク船ヲ中天ニ颠上ケ渦ニ逢テ船ハ茶臼
ヲ廻スカ如シ水手梶取膽ヲ潰シ周章騷ヒテ
馳廻リ船中ノ諸人上下老若共ニ茫然ト成リ
皆船底ニ醉卧タリ黒田甲斐守ハ流石船強キ

人ニテアリシカ共前後不覺ニ被見ケリ彼家
人ニ村田出羽守ト云者アリ此者一人船ニ不
酔船耳ヲ駈廻リ水手共ヲ励シケルヲ黒田見
テ汝ハ奇代ノ曲者哉ト被申ケルハ出羽守返
答ニハ惣シテ臆病者カ彼ニ懼レテ船ニモ酔
也ト申ス黒田腹ヲ立汝主ニ向テ推参也船ニ
テコソ左様ニ口ヲキケ戰場ニ於テハ此長政
ニ及ハンヤト被申ケリ逆風猶不止シテ船ト
モ悉ク本ノ風本ノ湊ニ吹返サル
同月十四日小川市左衛門同第九郎次郎倉

町右衛門兵衛中山又左衛門藤山右近カ船
湯浦ニ着翌ル十五日馬場内田衆同着船ス
一同十五日毛利輝元小早河隆景至風本着船
一小西ハ對州ノ城本ヨリ又船ヲ出シ海上三十
六里ヲ過テ同國豊崎ノ湊ニ着先爰ニテ小時
息ヲ休メ扨波風未タ静カナラサレ共又豊崎ヨ
リ船ヲ出シ海上四十里ヲ過同月十五日ニ朝
鮮國釜山浦ノ湊ニ着船ス
一直茂公加藤清正相良宮内大輔黒田甲斐守毛
利壹岐守ハ風ヲシ静リシニ依テ壹岐ノ風本

ノ渓ヲ出船セラレ同月廿日衛對州エ御渡海
アリ同廿日過對州豊崎ヲ御出船同下旬釜山
浦ヘ御着船直茂公ハ竹島ト云所ヘ御上リア
ル子持御側備ノ舟ヨリ大塚勝右衛門組私先
御先ニ陸エ上リ備ヲ堅フシテヨリ公ヲ上ヶ奉
ル清正ハ公エ次シ先立船ヲ熊川エ押廻シ陸
エ上リテ旗ヲ立ラレシト也

一 後藤家信ノ惣勢七百餘人ニテ釜山浦エ
五月四日着船スト後藤戦功記

一 四月十七日公清正熊川ニ到ラル上 征韓偉畧

此節太閤ヨリ御朱印數通アリ 舊記

一 高麗渡海ノ後九列島ヨリ肥国元
中国原私共相拵ヲ以渡シ申候所ニ
高麗元ヨリ思召ヲ紙ニ認メ義堂侍渡ス
ヲ信濃守九鬼大隅守脇坂中務大輔加藤右馬助
伯耆ヶ堂堂私重ヲ以信長ヨリ奉ル者ヲ渡海
高麗ヶ私ヲ人ヲ遣シ申候所ニ
私ヶ見ヲ以ヲ渡シ申候ハヽ自然ヲ事ヲ
調ヲ成ヲ方ヶ出来ハ多ク人数ヲ
ハヽ十七日ヲ小倉ヲ発ハ船ハ相田

如每年可申渡事

四月十九日　御朱印

猶為加賀守ゟ

高麗出中

一御法度之一書和判致仕候者、当地下人ニ申聞事

一公儀役者公方様御命、差相役儀ニ入申事

一百姓町人ニ至迄仕来候、米麦年貢ハ

不申出、他所ニ相売申間敷事

一高麗ニ渡海人数ハ年貢ハ

可申渡事

一川尻ニ百姓有之、見汁ハ忘さるやうニ

可申付事

一ニ三ヶ所ニ数人仕居候者共

ハ不残男女共在所ニ、居申

一法度以下猥ニ有之、有様ニ申聞

仕通者、可申沙汰事

一高麗渡ハ、歌舞伎、遊女、泊所城ニ有之

者、陣屋ニ沙汰可仕事

一年貢仕ハ、城ニ而ハ米ニ可仕

方ハ、浦ニ仕事

右之通能く御尋被遊可申候事

天正十年卯月廿六日　御朱印

一　右条々黒田官兵衛尉孝高に仕候者共に申付候間、若し背き候ハ、

成敗を加へ可申候事

禁制　高麗国

一　軍勢甲乙人不濫妨狼藉事

一　殺害人放火事

一　対地下人百姓時々雖令相違不許事

一　於下々無理事

右条々堅令停止訖、若違犯輩有之者、

忽可令成敗者也　仍如件

天正十年卯月廿六日　御朱印

一　於人質孔の別人、五位ゟ右京男女ゟ五歳

陸ゟ長位ゟ其外諸家ゟ来り候者共

内ゟ令申付ゟ而ゟ成敗ゟ

為後日之証文自対馬ゟ朝鮮ゟ百姓高麗

私ゟ日本端帆の船私六十艘毛利氏ゟ高麗

ゟ渡毛利ゟ播磨国ゟ首ゟ四人ゟ義ゟ殺

対馬ゟ召ゟ成ゟ令ゟ申付ゟ為獲度

差渡之旨於相着者舟船名護屋迄渡之尤
以自船渡海儀依用意手前ニ儀
尚可申付船頭舸子以下ニ於人足分船
下々者為手中領可申付候也

卯月廿八日　御朱印

鍋島加賀守とのへ

一小西摂津守行長宗對馬守義智ハ四月十五日ノ寅ノ刻諸勢ニ遥先立テ釜山浦ニ着船アリシニ松浦刑部卿鎮信法印父子同名源次郎定有馬修理大夫政純等モ其一列タルニ依テ

風波ヲ凌テ馳テ追付ヌ行長船中ニテ士卒ヘ向ツテ被申ケルハ武具ノ外ハ何色ニテモ上ヘタラス敵城ヲ攻落シナハ兵粮諸道具ハ何程モ城中ニアルヘシ夫コソ我物ナレ只々進テ城ヲ攻抜可シト下知シテ遠浅ニ成シカハ馬共ヲ追下シ陸近ク押付ル所釜山浦ノ人民ノ中ニ商買ノ為メ以前ヨリ日本エ渡リテ逗留シ妻子ヲ儲ル者アリ其縁ヲ以日本人モマタ此所ニ渡リテ住居スル者多シ是ヲ麗和ト云小西是ヲ知テ先ニ家人ヲ陸エ上ケ彼麗和ヲ呼テ

案内サセ一列悉ク釜山浦ノ陸ニ上ラントス
普聞集ニ四月廿五日小西行長清正ニ先
立テ朝鮮ニ着岸ストアレ共舊記ニ卯月
廿三日ノ御朱印如左アレハ四月廿五日
ハ恐ラクハ誤ナラン カ釜山浦ニ入ル
[illegible]
濟海釜山浦ヨリ始テ城ヲ築ク日ヲ以テ石見殿ヲ濟海殿
[illegible]
[illegible]

濟海ヨリ法華山下ニ在リ後世ニ伝ル石塁遺
[illegible]
[illegible]
[illegible]
卯月廿三日 御朱印

一朝鮮王李昖ハ兼テ日本ヨリ攻来ル由沙汰セ
シ故大キニ懼レ釜山浦ノ濱手ヨリ一里程西
ニ當リテ山ノ巓ニ一城ヲ築キ李雄ヲ大將ニ
テ戍萬餘人ヲ籠置其上五城ヨリモ孟明伯ト
云者ヲ加勢ニ遣シ被置ケリ既ニ日本ノ大軍

著船スルト云騒キシカハ海邊ニ住居シタル
男女老若悉ク山谷ニ逃隠シ掛章迷フ躰ニ計リ
十ヨ然ル處ニ城中ヨリ李雄カ弟李一雲ト洛
ノ加勢孟明伯數千人ニテ同十五日ノ未明釜
山浦ノ濱ニ出向ヒ矢石ヲ飛セ小特支ニテ相
戦フ其半小西ト宗下ノ方ニ船ヲ押廻シ横ヲ
入ケル間李一雲孟明伯忽追崩サレ皆城ニ逃
籠ル小西宗松浦何レモ軍士ヲ進メ彼城ニ押
寄時ノ聲ヲ上テ攻破ラントヨ然共城兵半方
ヲ放ツ事雨ノ如ク俄ニ攻入度ヲ不得小西ヲ

初メ寄手城ノ躰ヲ窺ヒ見ルニ石壁高ク聳ニ堀
ヲ深ク堀塀ヲ丈夫ニ構ヘ二方ノ山ノ尾傳ヒニ
柵ヲフリ要害堅固ニ見ヘタリ然共後ニハ高山
ノ嶮岨ヲ頼ミタルニヤ強ニ備ヲ不置小西宗
松浦是ヲ検察シ其両方ヲ圍ンテ一方ヲ明ク後
ノ山ニ勢ヲ廻シ鉄炮數百挺累ヘ掛シカハ城
中大ニ動轉シ一人モ不残逃走リ大將孟明伯
ハ討死シケリ小西早朝ニ此城ヲ攻陷シ首ヲ
切事八千五百人生捕貳百餘人也偖城中ニ入
テ見ルニ小西ノ申セシニ不違兵粮馬秣魚鳥ノ

内ニ至ル迫澤山ニアリ士卒是ヲ恍ヒ梅酸ノ
渇ヲ凌ヒテ息ヲ突ク於爰小西狄鞭ト云者ヲ近
付通辭ヲ以テ近隣ノ道路方角等ノ支ヲ尋子
問ニ答エテ申ケルハ自是乾ニ當テ三十里但六
丁ヲ一里ト云ヲ去リ東萊ト云所ニ一城アリ朝鮮ノ兵
楯籠ルト云小西諸軍ニ向テ被申ケルハ時尅
移ラハ彼城ニ国人集リ籠リテ攻難カル可シ
其上一日ノ中ニ両城ヲ攻落シナハ武名日本
エ高ク聞エ太閤ノ御感ニ預ル可キリ倡ヤ東
萊ニ越テ城ヲ攻落ス可シト申ス宗松浦以下是

ニ同意シ頓テ彼城エ押寄セ攻之此城ニハ李元
翼李平翼兄弟ヲ大将トシテ其勢一萬就千人
籠リシトナリ然ルニ今朝釜山浦ノ落人此城
エ迯入テ日本人ノ強剛ヲ鬼ヨリモ猶懼シク
云聞セケルニ城兵大ニ臆ヲ潰シテ居タル處
ニ小西一列関ノ聲ヲ作リ掛急ニ押寄セシカハ
城兵防ク事ヲセスシテ我先ニト城ヲ逃出東
西南北ニ散乱ス其中ニ宗象賢ト云者城ノ南
門ニ登リテ相戦ヒシカ味方ノ敗走スルヲ見
一足モ不退日本人ニ向テ座ヲ組威儀ヲ正シ

刀ヲ受テ死ス斯テ小西ノ先鋒舎弟主殿助長
統并家臣木戸作右衛門憲重手勢ヲ以テ北ル
ヲ追首ヲ切戮九百餘人也小西手ヲ不碎當城
ヲモ容易乗取テ勢ヒ龍ノ水ヲ得タルニ不異
行長又通辭ヲ以テ生捕ノ者ニ尋子聞ニ申シ
テ云ク王城ヲ守護スル為忠州ノ城ト云堅城
アリ王僧隣成允門催應珠金應瑞柳美龍此五
人ヲ大將トシテ七萬五千人楯籠リテ城ヲ守
ル兵粮澤山ニ有テ能ク射ル者多シ此城少全キ
故ニ朝鮮未タ大ニハ不驚ト云小西是ヲ聞テ急

キ其城ヲモ攻ント申シケルヲ松浦鎮信宗
義智ノ申サレケルハ寨ノ外弱敵ニ候エハ恐
ルニ不足トイエ共數日船中ノ草臥陸ノ戰旁
ニ人馬共ニ労レテ見エ申ノ間先シハシハ休息
可然トアリシニ依テ小西ト同シ其儘東萊
ニ陣シテ五六月ハ人馬ノ労ヲ休メ扨忠州ノ
城ヲ攻可シト同月廿七日小西弟主殿助ヲ先
陣トシテ東萊ヲ打立忠州ノ城エ押寄着ト均
ク襲ヨリ鯨波ヲ上シカハ城中驚キ騒ヒテ數
萬ノ者共悉ク落散殘兵纔六七千ニ見烈シク

防ギ戦ヒケルヲ小西計リテ主殿助ニ三千餘騎ヲ差副城下ノ在家ニ火ヲ掛サセ又伊賀ノ忍ノ者百人呂俱シケルヲ城ノ後エ廻シ鬨ヲ作ラセケレハ城中裏崩レシテ城ノ大将分申碇ハ江ニ飛入テ死シ金汝岫ハ討死シ李鎰ハ落去リ其外或ハ水ニ入或ハ切殺サレテ城ハ急落去シケリ松浦鎮信父子特ニ戦功アリ小西切所ノ首級ヲ大將軍秀家ノ方エ送リテ城城攻板シ次第一々注進申サル

李元翼李平翼ヲ大將トシ其外李班宗象賢以下ノ輩城内ヲ守リ居タリ李班ハ臆病者ナルカ釜山浦落人ノ語ルヲ聞既ニ逃支度ヲシケリ又宗象賢ハ勇謀備リシ者ナルカ李班カ周章ケルヲ見テ牙ヲ噛諫メケレ共李班敢テ不用我等ハ城外ヘ出外ヨリ謀ヲ廻ス可シト終ニ東萊ノ城ヲ逃出蘓山驛ヘ至リ陣スト高麗軍記

四月十五日行長義智東萊ヲ囲ニテ敵兵三千餘ヲ切城陷ル此時行長宗象賢カ義死ヲ感シ其屍ヲ城外ニ葬リ標ヲ立テ々

之ヲ識シヲクト征轉偉畧

朴晋ト云者東萊ヘ在陣シケルカ小西勢ノ軍粧ヲ見大ニ懼レ密陽ノ本府ヱ迯帰リ日本勢ヲ防ントテ鵲院ト云所ヱ要害ヲ構ヱテ待懸タリ小西梁山ノ城ヲモ攻落シ鵲院ヱ押来レリ時ニ朴晋散々ニ相戦小西後ノ山ヘ登ラセテ鯨波ヲ上サセタリ敵是ニ驚キ大将朴晋ハ漸ク命計リニテ密陽ニ北帰リ兵器倉庫等焼捨其身ハ行方不知成ケリ李班モ猶堪ヘ兼已カ居所ヱ逃帰リ妾ノ居タリシヲ先ヅ宅ヲ出シテ遁レシメ其暁ニ其身モ跡ヲリ居所ヲ落去ケルト高麗軍記按ニ李班懲毖録ニ作李珏

廿七日行長清正両手忠州ニ向ヒ一手ハ江ニソヒ一手ハ山ニシタカヒ道ヲ分テ相進ム申砬李鎰ノ両将忠州ニ陣シタルヲ鎮信晴信火牛ノ術ヲ用テ打破ント議ス行長コノ計ニシタカヒ夜ニ入リテ火牛ヲ敵ニ向ヒ放カケシニ按ノ如ク申砬カ軍大ニ崩レテ惣敗軍トナリ大将申砬

モ江ニ飛入テ死シ其餘ノ敵兵モ悉ク江ニ
溺死セリ只李鎰獨ヤウ〳〵ニシテノカ
レ去ル行長等カ兵大ニ勝テ首三千餘級
ヲ切トリ數百人ヲ生捕ケリ斯テ行長夜
中ニ又忠州城ニ攻ヨセ兵ヲ城ノ後ニマ
ワシテ火ヲカケサセシカハ敵兵コレニ
防キ兼テ城遂ニ落入シカハ金汝岳モ乱
兵ノ中ニ討レニケリト征韓偉畧
按ニ此柳弘龍ヲハ本書第七巻ノ明ノ李
如松朝鮮ヲ援ノ條ニハ柳成龍トアリ征

韓偉畧ノ作者水戸ノ川口長孺カ考ニ曰
武備志ニ邪臣柳弘寵李德馨李恂ヲ惑ス
トヽ事ヲ載タリ柳弘寵ハ即柳成龍カ事
ニシテ寵ト成ト音相近ク龍ト寵ト字相
似テ轉シアヤマレルモノ也ト云然レハ
柳弘龍柳成龍柳弘寵其名ハ異ナレ共本
一人ノ事ナリ

一同廿九日朝鮮ノ王城ニハ忠州ノ城ヲモ攻落
サレヌト聞エシカハ老若男女周章騒キ東西
ニ走リ迷ヒ國王李昖ハ弟三ノ王子ヲ同道呂

レテ廿九日ノ夜ニ入リ急キ敦義門ヨリ被出
沙峴ニ至リシ時已ニ東方明ナントス折節大
雨篠ヲ突碧蹄驛ニ被着ケルニ彌大雨降ル惠
陰嶺ヲ過ヲ臨津ニ着ル雨猶不止此所ノ河ヲ
越シ東破驛ニ至リシ時上下太タ飢タリ免角シ
テ飢ヲ扶ケ五月朔日ノ夜開城府ニ着シ同四
日ニ寶山驛ニ至リ五日安城龍泉劔水驛ヲ越
鳳山郡ニ着黄州ニ至リ七日中和ヲ過テ先平
壤ニ入リ夫ヨリ北ノ方義州ヘ落ラレントソ
聞エシ備后妃并二人ノ王子臨海珒順和琿大

臣以下ハ兀良哈ヘ落ラレケリ
或記ニ朝鮮王李昖兼テ日本ノ大軍襲来ル
由傳聞ヲ所々ニ検使ヲ遣シ鄭撥ト云者ヲ
釜山浦ニ差向置ケル處ニ此者油断ヲナシ
絶影島ト云島ニ獵ニ出居タリシニ四月十
三日日本ノ先勢小西カ兵早釜山浦ニ押入
シ故大ニ周章急キ釜山浦ニ出テ相戦フトイ
ヘ氏利ヲ失ヒ同十七日鄭撥城中ニ迯入リ貳
萬餘人ヲ以テ小西ヲ防キ或ハ毒矢ヲ射掛
或ハ半弓ヲ放シケレ氏終ニ不叶鄭撥討死

ス其半小西軍兵ヲ分西平浦ノ城ヲ攻落ス
城兵ノ内尹與信大ニ勇ヲ振フテ討死シ李
班ハ東萊ニ落行ト
或記云此時加藤清正小西ニ先ヲ越レシヲ
怒リ人ノ跡ハスマシキ物ヲト云テ對州ニ
モ着ス釜山浦ヲハ餘所ニ見テ熊川ニ船ヲ
着阿蘭川ニ廻ラントスル欲ス爰ニ慶州道ノ者
ト共ニ相集リ大將ニハ李權慓李福男撰殿長
郢越龍高彦伯五人雜兵五百餘人出向ッテ
是ヲ防クニ加藤鍋島二手ニ分リ打戦フ于

時鍋島ノ先鋒成富十右衛門鍋島平五郎一
戦ニ打負テ追立ラレシニ清正林ヲ廻リテ賊
軍ノ中央ニ駈出シ味方敗軍ト見テケレハ
先鋒ノ加藤美作守斤岡右馬佑庄林隼人無
會釋衝テ懸ル其時鍋島直茂モ旗本ヲ以テ
突返シ勇ヲ振フテ相戦ヒシ程ニ賊軍終ニ
打負テ皆迯去ケリ是ヨリハ墓々シキ敵モ
ナクテ番所二箇所踏潰シ大手ノ味方ト一ツ
ニ成ントス列ノ方ニ急カレシトアリ
或記云直茂公黒崎ヨリ被呂連タル朝鮮人

爰ニテ申ケルハ是ヨリ乾ノ方ニ當テ竹西
ト申ス津アリ日本道ニテ三里程モアル
可シ爰ニハ有德ノ者多キ由申ニ付テ成富
十右衛門罷向セ片端ヨリ火ヲ掛悉ク切捨
ニス是ヲ見テ此所ノ者膽ヲ潰シ皆迯失シ
カハ首十四五討取テ成富竹島ニ帰ルト
朝鮮水陸ノ將皆恇怯和兵鼓ヲ鳴シテ横
行シ數百里無人之地ヲ蹈畫夜北上ス一
度モ取テ齟齬シテ其勢ヒヲ緩スル者無
シト懲毖録

諸勢朝鮮都入

一直茂公加藤清正相良宮内大輔毛利壹岐守黒
田甲斐守等ノ諸將四月下旬朝鮮ノ地エ上ラ
レ小西ニ先ヲ越レシ夏何ヒモ無念ニ被思シカ
ハ片時モ早ク王城エ攻入可シト忠州ノ巽ニ
當リテ五松原ト云廣キ野ノアリケルニ皆參
會セラレ小西モ此所エ来ラレ各都入ノ評定
アル差分ニ加藤被申ケルハ今日ヨリノ先陣
ハ此清正ナル可シト于時小西ノ被申ニハ朝
鮮國先陣ノ事ハ先立テ日本ニテ太閤殿下被

相定所先ハ此行長ニアリ然ルヲ今更清正私
ニ被申条御法ナキニ似タリ一向行長ニ於テ
ハ兼ルマシキ由被申清正忽チ面ヲ変シ言葉ヲ
替テ汝天草ノ一揆スラ治メ得ズシテト申サ
ル行長取敢ズ爰ニテ天草入ヘキヤトテカニ
手ヲ掛ラル清正重テ其強ミヲ爭テ天草ニテ
不レ出ヤトマレカクマレ先陣ハ當座ノ手柄次
第ニ可致ト既ニ事出来シト見エテ中々言語
道断ノ躰也一座ノ諸將與ヲ醒シテ居ラレシ
處ニ直茂公被仰ケル様ハ小西殿ノ仰セニ候

然共御邊ハ先立テ御渡海アリ三箇所ノ城ヲ
被攻落御勲功莫大ナル上ハ是ヨリ以後王城
ヘノ先陣ハ加藤殿ト御両手ニ別レ給ヒテハ
如何候ハンヤト被仰ケルニ小西理ニ伏シ加
賀守殿ノ仰セニ候然レハ通事ヲ以テ相尋子
候ニ是ヨリ王城ヘ向フ道二筋候其内南大門
ニ至ル道ハ行程百里ニシテ少シ近ク候然共
大河アリ又東大門ニ至ル道ハ百廿里ニ及ヒ
少シ遠シ然レ共河ハアラス山ハアル由申候
何レノ筋成共清正ノ心次第ニ被趣可然ヤト

被申シカハ直茂公モ御悦ヒニテ清正納得ア
リ於然ハ河アリトモ近キ筋ニ向ヒ候ハントト
即加藤清兵衛庄林隼人ヲ先陣ニ申付五松原
ヲ立テ南大門通リニ馬ヲ發セラル直茂公モ
鍋島平五郎成富十右衛門ヲ御先手ニテ相良
宮内大輔ト同ク後陣ニ打續ケラル
東大門通リハ大河モナク道モ却テ近シ南
大門通リハ遠クシテ大河アリ然ルヲ小西
行リテ斯申サレシト也釜山浦ヨリ朝鮮ノ京ヘ一千二百六十里但六丁九十六日路ト云

斯テ小西行長ハ猶モ清正ニ先ヲ越ントト被思
シカハ頃虜リ置タル朝鮮人ノ中ニ山川ニ達
者ナル者貳百餘人王城案内ノタメニ召具シケ
ルヲ其中河ニ得タルヲ廿餘人勝リテ家人木
戸作右衛門日比左近右衛門ヲ相副清正ノ向
ハレタル南大門通リノ道ニ先立テ差遣シ彼
大河ニ繋キタル渡シ船共悉ク切流シ其アタ
リノ在家一宇モ不殘焼拂ヒケリ斯テ清正宗
對馬守ノ方ヘ案内者ヲ被乞ケルニ宗ハ元来
小西ト縁者ニテアリケル故内談ノ上態ト訥

ノ徳右衛門ト云埒不明者ヲ一人遣シ被申ケ
ル清正カナク何レ寸時モ早ク小西ヨリ先ニ
王城ヘ着ント鞭ヲ揚ラレケルニ先手ノ加藤
清兵衛庄林隼人ヨリ小西カ仕業大河ノ躰ヲ
清正ヘ注進ス清正即件ノ大河ニ着テ見ラレ
ケルニ渡シ船一艘モナシ徒ニ渡ラントスレ
トモ其廣サ五六町餘リニ見エ河水漲リ鳴
テ冷々シキヿ云計リナク中々難叶清正ヲ初メ
直茂公相良長安其手ノ士卒迄皆アキレテ一
歩々々河端ニ屯シ河濱ヲ廻リ渡シ船ヲ求シ

力尼船一艘モトシ斯リシ程ニカ不及一日餘
滞留アリケル處ニ當手ノ先鋒鍋島平五郎自
身河ノ上下ヲ馳廻リテ流船一艘取得テ来ル又
齊藤用之助奇代ノ水練ニテ彼漲ル大河ヲ游キ
越川向ニ繋キ置タル敵船五艘ヲ取テ来ル
清正ノ家人曾根孫六モ同ク河ヲ越テ船ヲ求
ケリ斯テ船ヲ筏ヲ組テ肥後肥前ノ軍勢貳
萬餘人不残河ヲ越ス夫ヨリ梁山ニ御着陣翌日
御旅行其翌日彦陽ニ着ル

或記云此時清正我士卒ノ中ニサルヘキ水

練ヤアルト尋子ラレシニ越中國ノ者一人
出テ生國姫川ヲ渡シ習フテ海ニモ入リ候
間此河ヲモ可越由申スニ依テサアラハ渡
テ向ニ船ヤアル可捜由被申付彼者一人此
河ヲ渡リ船ヲ一艘乗取リ来リ夫ヨリ段々
渡テ又船四五艘奪ヒ取惣軍不残渡リシト
アリ平五郎用ヒ助カ事ヲ不載
四月十七日清正直茂公熊川ニ至リ廿一
日清正熊川ヨリ行々地ヲ畧シテ慶州ニ
至ル諸城ノ逃兵爰ニ集マレリ清正進ニ

テ城ヲ攻落シ敵三四千ヲキリ軍兵ヲ諸
城ニ残シ置キ猶京城ニ進ニ向フ廿九日
黒田長政清正直茂公忠州ノ郊野ニテ行
長ニ會シ京城ヲトラントト議ス宗義智京
城ノ圖ヲ出ス圖ノ中ニ司馬門内藥鄽ノ
路アリ清正行長ニ向テ曰貴殿此道ヲト
ラハイカント是行長ハ藥舗ヨリ出レハ
戲レテ也行長コレヲ怒ル公諗笑シテ是
ヲ解ル行長曰予孤軍深ク敵地ニ入苦戦
シテ全キヲ得ル天ノ助ル所ニ非スヤ清正

日貴殿抜懸シテ功ヲ成スハ宗氏ノ案内者
タルニ由リ必シモ貴殿ノカナラシ且殿
下ノ仰ニ予ト貴殿ト隔日ニ先陣タラシ
ム而ルニ貴殿之ニ背クハ何リヤ今日ヨ
リイヨヽ隔日ニ極メント云フ行長云今都
城ニ近付ノサレハ両道ヲワケテ共ニ進テ
之ヲ抜ントテ閲ヲヒ子ランントス清正云
軍令ヲソムキテ私ノ利ヲ貪ル何リ高人
ノ行ニ似タルト云行長大ニ怒リカニ手
ヲカケ已ニ大事ニ及ントス直茂公私ノ

爭ヒヲ以テ笑ヲ外國ニ貽スハ不忠ノ甚
シキナリト云鎮信モ亦詞ヲ盡シテ両人
ヲ諫ノ止ム而將大ニ愧服シテ日此後復爭
論スルフナカランコヽニ於テ諸將酒宴
ヲモフケテ歡醉シ道ヲワケテ進ミ攻ン
トスト征韓偉畧
南大門通ニ大河有ル齊藤用之助叔又成富
茂安備内ヨリ持來助左衛門河ノ上下ヲ
走リ廻リ小船五艘乘取ト成富戦功記
天龍川ト申ス大河ニ行掛リタル時井上

弾左衛門鍋島茂里ヘ川向ニ船相見ル由
申シテ右川ニ飛入船一艘取来ル茂里悦
ヒ右船ニ乗特他ノ勢我先ニ乗込ヘシシ
ケルヲ弾左衛門大聲揚追拂ヒ一手計リ
乗組一番ニ川ヲ渡リ右先見計ヒ并大麾
振役申付尤此節足軽五人相副ト（主水戦功記）
金命元ト云者日本勢ヲ防カニタノ漢江
ヲ守リ濟川亭ヘ在陣シケルカ加藤鍋島
相良ノ軍粧ニ恐レ一戦ニモ不及臨津ノ
方ヘ落行タリ公清正長安翌日河濱ヘ出

見ラレシニ河向ニ船多ク繋キ陸ニハ敵
大勢木ノ蔭土手ノ間ニ並居タリ清正久
シク詠メ居ラレケルニ川上ヨリ水鳥四
五羽連子浮ンテ向ノ岸ヲ静ニ通リケル
清正見テ申サルヽハ不思議ヤアノ如ク
敵大勢ニテ備ヘ居タラン所ヲ水鳥浮ヒ
テ通ル可キニアラスサレハ人ト見ユル
ハ作リ物ニテアルヘシ水ニ叶ヒタル者
アラハ游キ越シ見繕フヘシト其言葉ノ下
ニ曾根齋藤大河ニ打入ケルト（高麗軍記）

一小西摂津守ハ東大門通リニ懸テ驃州ノ江ヲ筏
ニテ渡リ五月朔日辰ノ刻其一列ノ諸將松浦
肥前守宗對馬守大村新八郎宇久大和守有馬
修理大夫等ト同ク洛ヘ着陣シ東大門ニ至テ
入トスルニ大門ヲ犇ト塞タリ内ノ體ヲ伺フ
ニ防キ戰ハントスル軍兵モナシ門ノ高サ凡
六七尺ニ打見エテ石壁眼上ニ峙チ入ヘキ樣モ
ナシ寺木七四郎進出水門ヨリ五十人百人宛
入テ見ヨト云サラハ水門ヨリ入ルヘキカト
見繕フニ是モ五尺四方ノ水門ヲ鉄ヲ以テ打

延シタヽカニ構エタリ于時木戸作右衛門憲
重加藤内匠吉成馬ヨリ飛下仕樣コソアレト
鉄炮ノ臺ヲ迦シ其筒ヲ手子ニシテ水門ノ扉
ヲ念ナク刻起シテ明ニケリ其時諸勢我先ヲ
爭ヒ込入ントス行長制スル支ヲ不得馬ヲ駈
寄長刀ヲ以テ込入輕卒二人掛倒シ大ノ眼ヲ
見出シテ法ヲ出シ下知シテ云ク乱妨スヘカ
ラス酒家ニ入サレ板駈スヽト貳萬ニ及フ軍
勢ヲシツカト静メ鎮リ返テ若ヤノ合戰ヲ心
ニ備ヘ其作法ヲ正シ

此小西行長ハ元来泉州境ノ町人白粉屋ノ
小西了佐（如清）ガ力子也（薬種商人白粉屋如清入道）先年太
閤中國御征伐ノタメ備前ニ御在陣ノ時魚
屋ノ手代シテ常ニ陣所ヘ詰居タリ奇代ノ
戈覽者ナル故近衆（ノ）氣ニ入リ後ニハ太閤
ノ御耳ニ達シ直ノ御用ヲ被仰付ケルニ不
依何度御心ニ叶フテ相調ヘケリ夫ヨリ可被
召仕由被仰奉公ニ出ケル處ニ生得智恵深
ク心剛ナル者ニテ如睦甲冑トモニ抽功無
程近習ニ成リ其後次第ニ登庸シ拾餘箇年

ノ間ニ大身ニ成テ近年肥後國宇土城ヲ給
ヒ廿四萬石知行ス今度御目鑑ヲ以テ異國御
征伐ノ御先手ヲ仕リケルニ御目利ノ如ク
大功ヲ立異國本朝ノ者ニ己ク武勇ノ程ヲ
見セ耳目ヲ驚カセリ寔ニ無雙ノ英雄ナリ
ト諸人擧ツテ褒ケルト也
一直茂公ハ加藤清正相良長安ト同ク五月二日
王城近ク御着陣被成通辭ヲ以テ先（ヲ）淵底ヲ御
尋アリケルニ國人申テ云ク國王王子后妃其
外大臣以下ハ三日以前ニ洛ヲ退キ給ヒ二日本

ノ小西ト云者昨日朔日ニ王城ヘ入テ四門ヲ
差堅メタル由ヲ申ス直茂公清正長安彌無念
ニ被思シカ共其甲斐ナシ清正ノ先手加藤清
兵衛庄林隼人大門ニ至テ爰ヲ明ヨト叩キシカ
トモ小西ノ家人等門ヲ差堅メ矢倉ノ狹間ヨ
リ是ハ小西摂津守都入ノ先陣ニテ昨日王城
ニ入リ其家人四門ヲ堅メテアル也若用度ア
ル日本人ナラハ五三人ハ不苦入ル可シト云
清正猶躊躇ニ不堪此上ハ王城ヘ入テモ益ナ
シサラハ責テ王子ヲ追テ虜申サントト王城ヘ

ハ不入シテ洛外ニ陣ヲトラル直茂公モ同ク
洛ヘ御着陣即日真崎長門守ヲ以テ日本ニ於
テ名護屋ノ御本陣ト佐嘉ヘ御狀ヲ被差越今
二日朝鮮ノ都ヘ御打入アルノ慶帝王子以
下ハ三日以前ニ都ヲ被退ノ由御注進アル
今二日雨降ル
今日直茂公都入ノ時御先立大塚勝右衛門
御側組侍六十人呂具シ都ノ案内ヲ見繕ヒ
公ヘ出向テ御道引申ス當家ノ軍勢ハ大砲
王城ニ入テ陣ヲトル其中ニ鍋島平五郎ハ

城外二里ヲ去テ陣ス

直茂公名護屋御出船釜山浦御着并都入

ノ日限説々ニシテ不決左ニ記之

三月朔日ニ御先勢加藤清正小西行長太坂

ヲ首途シ九州ヘ趣ク太閤殿下ハ同月廿六

日御出京御跡備ノ衆ハ同廿七日ヨリ打立

四月五日六日迫ニ不残發足アリ段々名護

屋ヘ参着同月十二日辰ノ刻加藤清正小西

行長鍋島直茂相良長安宗義智其外御先手

一同ニ朝鮮ヘ渡海同十三日壹岐ノ風本ノ

浜ニ着船逆風故逗留但小西ト宗ハ同廿五

日ノ夜壹岐ヲ出船シ同廿八日朝鮮釜山浦

エ上リ五月十日ニ都入加藤鍋島ハ五月上

旬釜山浦ヘ着同十一日ニ都入ル

三月朔日小西名護屋ヲ出船加藤ハ名護屋

ノ縄張等可一見由依仰両日延引シテ出船

トモ

三月朔日諸将九州ニ趣キ同十日名護屋ニ

着同月十二日辰ノ刻加藤小西鍋島黒田等

名護屋ヲ出船同十三日壹岐ノ風本ニ至リ

逆風故逗留小西ト宗ハ同廿五日ノ夜壹岐
ヲ出船同廿八日酉ノ刻釜山浦ヘ上リ四月
十日ニ都入加藤鍋島等ハ同十一日ニ都入
ト也
三月朔日直茂公朝鮮御渡海五月十一日ニ
都入共
四月十二日直茂公名護屋御出船翌十三日
壹岐ノ風本ニ御着船日和ヲ被待同廿五日
迄御逗留同廿六日巳ノ刻ニ風本御出船ト
イヘ共猶難風故御船ヲ被返其後風波静り

ニ依テ御船ヲ被出五月初旬朝鮮釜山浦
ヱ御着船共
純陽廿三日直茂公御出船梅天七日釜山浦
御着ト也
三月廿六日直茂公伊萬里御出船四月十七
日清正ト同ク釜山浦ニ御着船五月二日ニ
都入ト也都入ノ日限ハ異朝書懲毖録同ジ小西ハ四月廿
八日寅ノ刻釜山浦ニ着當城ヲ攻落シ同日
午ノ刻計リニ東萊ノ城ヲ攻破テ同廿九日
忠州ノ城ヲ攻落シ五月十日ニ都入共

懲毖録ハ朝鮮ノ柳成龍王李昖ニ仕ヘテ
位左相ニ至リ軍國ノ事ヲ総司ル壬辰ノ
乱身自其時ニ當リ親ク其事ヲ見テ甚之
ヲ憂傷セリ亂后成龍其君國ノ為後患ヲ
懲毖ンコトヲ念フテ斯書ヲ撰著シ詩経
ノ語ヲ取テ名ケタリシ實録ナリ其人物
ノコトハ前條ニ出セリ
小西忠州ノ城ヲ攻落シケルハ五月八日ノ
事也トモ
小西ハ四月十三日釜山浦ニ着五月三日ニ

都入共
舊記ニハ五月二日王城落去トアル御朱
印アリ其文ニ云ク
急度分付遣
一 京ニ有ル輩ハ京ニ留ル可ク江原
今日十六日ニ和議成ル急ギ帰国ス
出ル分船迄悉ク分ケ与ヘ知行ス
沙汰後ニハ通事ヲ以テ理中ノ事
分付遣ル事
一 急度下ル城内領掌ニ有ル者取次ニ

前々御護致可申候ハゝ可有御沙汰ハ
一船之内猥雑之儀御用之外ハ一切被申文ニ
下仕ハ猥之儀ハ御法度何方ニても可被申所可
仰付事
一船之外之時節下仕ハ上船之上ニ者勿論御扈従まて
ニて船々之うちに下々共ニ至迄町人逸返させ猥之儀
無之様ニ可被申付事
一此方之者相判之者下々共ニ至迄御法度之儀ハ船中大明
之境目ニ下々無之様ニ相勤ハ無事ニ可申付
大庭之諸次第ニもし可有之趣ハ定而御沙汰ハ有之候まじく候

備兵之儀者加藤主計頭次小西摂津守可申付也
六月十六日　御朱印
鍋嶋加賀守とのへ

龍造寺安順四月廿九日朝鮮釜山浦ニ着
五月十七日王城南大門ニ至リ公ニ謁ス
爰ニ原市右衛門筑後一木村十郎恵俊孫 原疾病ニ依リ
船本ニ残ス又西四郎右衛門初兵十郎為便半
途ヨリ釜山浦ニ帰ル此故両人後レテ都
ニ趣ク異敵ノ残黨山林ニ伏シ弓ヲ射掛
ルコト如雨原西弁ニ家人等不顧身命打戦ヒ

敵數多討捕トイヘ𪜈毛四郎右衛門以下四
人箭ニアタッテ死ス市右衛門モ五ケ所
ノ疵ヲ蒙リ存亡不定也然ル處ニ一人ノ
女性小豆飯ヲ捧テ與之市右衛門是ヲ食
シ口中忽チ和キ氣分モ又快シ禮謝セン
ト欲レ𪜈女性爰ニ不居ニヨリ思フハ異
國ノ女子今何ノ好アッテカ小豆飯ヲ我
ニアタフヤ我常ニ愛宕勝軍神ヲ信仰ス
彼御供小豆飯也擁護無疑ト心肝ニ銘ス
此時浮田秀家ノ臣壹岐守某来會シ乘替

ノ馬ニ助ケ乘醫師ヲ副ヘ是ヲ王城ニ伴フ
安順深ク謝之公モ亦御使ヲ被遣秀家及
壹岐守ニ御禮被仰遣ト水江事畧
和軍東萊ヨリ三路ヲ分ッテ進ム一路ハ
梁山密陽清道大丘仁同善山ヨリ尚州ニ
至リテ李鎰ノ軍ヲ破リ一路ハ左道長鬐
機張ヨリ左兵營蔚山慶州永川新寧義興
軍威比安渡龍宮河豊津ヲ陷レ聞慶ニ出
中路ノ兵ト合シ鳥嶺ヲ踰ヘ忠州ニ入又忠州
ヨリ両路ニ分ル一ハ驪州江ヲ超ヘ楊根ヨ

リ龍津ヲ渡リ京城ノ東ニ出ヒ竹山龍
仁ニ趣キ漢江ノ南ニ至ル又一路ハ金海
ヨリ星州茂渓ヲ過ギ江ヲ渡リテ知禮金山
ヲ歴忠清道永同ニ出清州ヲ陷レ京坊ニ
向フ懲毖録

李昞在位日久ク酒色ニ沈湎シテ政事ニ
怠ル邪佞ノ士逢合シテ忠直ノ臣疎斥セ
ラル且國中無事ニシテ民戦ヒニ習ハス
和兵俄ニ至ルト聞テ君臣手ヲ束子テ策
ナク百姓山谷ニ逃レ奔将更風ヲ望ンテ

迎ヘ降ル故ニ都城不守宗廟空虚トナル
ニ至ル征韓偉畧

一朝鮮王城ノ形勢壮観實ニ耳目ヲ驚セリ先東
ニ流レタル江ヲ臨江ト云西ニ流レタル江ヲ
西江ト云南ニ流レタル江ヲ漢江ト云北ニアー
ル山ヲ北山ト云南ニアル山ヲ南山ト云良ノ
方ノ山ヲ三角山ト云此三山三方ニ峙チ其間絶
頂深谷ヲ不云石ヲ畳テ築キ城ヲ囲フ廻凡四
十里也日本ニテハ七里半也直法公人ヲシテ被検之其中ヲ洛中ト
シ北山ノ下南面ニ紫宮ヲ建石ヲ削リテ四壁

トス五歩ニ一樓十歩ニ一閣廊腰縵廻簷牙高啄幾殿幾閣ト云事ヲ不知丹墀決御溝自西ニ向テ清流其上面ニ有石橋石蓮華ヲ刻リテ欄干ノ柱トス橋ノ左右ニ石獅子四匹ヲ置リ其中央ニ石ヲ削リ高サ八尺ニ疊ニテ垣トシ艮巽坤乾ノ四隅ニ又文石獅子四疋ヲ置其上ニ紫震清涼ノ両殿ヲ建石ヲ以テ柱トス備四面ニ上下ノ龍ヲ散シ以瑠璃為尾其頭ハ皆青龍ヲ縫リ又栴檀ヲ以テ架梁ノ椽トシ其端毎ニ一ツノ風鈴ヲ釣畫棟ニ掛ニ朱簾伸金銀連珠玉天上四

壁ハ五色ハ彩ヲ以テ麒麟鳳凰孔雀鸞鶴龍虎ヲ畫キス紫震ノ階級ハ中ハ石ノ鳳凰ヲ敷左右ハ石ノ丹鶴ヲ敷タリ彼王城ノ形勢言葉ニ絶テ仙界カ又龍宮城共云可シ

洛人ノ云柳此都ハ京畿道ノ府也貳百五十年以前開城府ヨリ此所ヘ移ス名付テ漢陽城ト云

五月十八日殿下贈書于秀次曰征韓偉畧

朝鮮都城既陷矣予来春帥兵入明蕩平疆宇徒當今鑾輿于彼地而賡寶圖以甲

午歳為期乗輿沿途駐驆総用行幸式皇
朝寶祚推戴八条宮以卿為明地關白朝
鮮地遣岐阜宰相若倫前宰相總統乗輿
經貴奉畿甸傍近十州封卿以百州皇朝
關白大和中納言備前宰相等臨時選擇
而任焉卿善知此意
公五十五歳ノ御時也

直茂公譜考補第六卷終

国立公文書館
National Archives of Japan